

て若太夫のために淨瑠璃の筆をとつた。その作は元祿十二年の頃から享保八年頃まで續いて出

天 新 島

てゐる。歿したのは寛保二年十月四日であり、八十歳の時であつた。作品は四十曲程あるが八  
**百屋お七・心中二つ腹帯**の如きは世話物として傑れた作であり、**鎌倉三代記**は時代物としてすぐ  
 れて居る。**八百屋お七**は少女お七が我家の火事のため寺に避難した折戀し合つた吉三を忘れか  
 ね、また火事になつたら吉三と會はれようかとのほかない頼みに家に火をつけて、火事を出し、  
 終に刑場にひかれる次第を敘してある。西鶴の**好色五人女**に扱はれて居ると同じ題材である  
 が、西鶴が愛欲のまゝに動いて行く自然のまゝの姿を描いて居るに對して、海音はうら若い少  
 女と思はれぬ位、義理に徹した性格を描いて居る。近松の世話物も義理と人情との葛藤を描い  
 て居るが、人情が主であるに對して海音は寧ろ義理を主として扱つて居るのである。**心中二つ**  
**腹帯**は近松の扱つた**宵庚申**と同じ題材を扱つて、地味な夫婦の情死を描いて居る。海音は近松  
 に比して遊廓などの花やかな背景のない愛慾生活を多く描いて居るが、この作は彼のこの特質  
 を最も多く發揮して居るのである。

要するに海音は近松に比して劣つてはゐるが、なほ近松に次いですぐれた作家であつたので  
 ある。近松と海音とはそれ〴〵竹本座と豊竹座とに據つてゐたが、彼等の後にも兩座は對立し  
 て勢力を争ひ、幾多の淨瑠璃作者を出した。それ等については次節に説く事にする。

なほ此の期に於ては淨瑠璃ほどの勢力は無かつたが演劇が行はれ、従つて狂言本も製作され  
 た。近松門左衛門にも狂言本の作が多くあり、名優坂田藤十郎は近松と互に影響しあつた俳優

であつたのである。

## 二、淨瑠璃の展開と歌 舞伎脚本の成立

近松・海音が淨瑠璃界を去つて後、竹田出雲は竹本座にあつて近松の跡を継ぎ、淨瑠璃に一展開をなさしめた。

竹田出雲は名を清定といひ、近松に次いで竹本座に據つた淨瑠璃作者で、享保八年に作つた**大塔宮晴鏡**を始めとして、幾多の作をなし、寶暦六年六十六歳で歿した。彼はからくり芝居で有名な竹田近江を父とした人であるから、人形等に關しては細かい經驗もあつたのであらう。近松の抒情的敘事的な傾向から一步を進めて、劇的な構想に工夫を凝らし、複雑にして而も統一のある場面を構成する上に於て成功して居る。彼の作品は多くは合作であるが、演出の上で近松に勝つて居るものがあるために、今日もその生命を得て

竹田出雲



現存の操と近松半二極彩色娘扇

居るものが多い。菅原傳授手習鑑・義經千本櫻・假名手本忠臣藏・双蝶々曲輪日記の如きはそれである。菅原傳授手習鑑は延享三年の作で五段物であり、菅公の流謫に材をとつて一子菅秀才に對する武部源藏夫妻や松王丸等の忠義を扱つて居るが、第四段の寺子屋の段は源藏夫妻の苦衷、松王丸の陽に時平につくと見せて、陰に我子を秀才の身代に立てるその犠牲的精神が人の心を打つものがあり、最も人口に膾炙して居る。義經千本櫻は延享四年の興行で、同じく五段物であり、源義經が平家追討の後頼朝と不和になつた事件に材をとつて忠臣佐藤忠信の苦衷を配し、靜御前や維盛の妻若葉内侍等を扱つて複雑な説話を構成して居る。又假名手本忠臣藏は寛延元年の興行であつて十一段物である。赤穂義士の仇討を扱つて居るが時代を室町時代にして居る。赤穂事件を扱つた作として最も代表的な作であり、人形操の劇としての性質を代表するものとも言ひ得べく、複雑なる事件を統一して舞臺演出にあれだけの効果を得しめたのは、出雲の脚本作者としての力量を示すものでなければならぬ。更に双蝶々曲輪日記は寛延二年の興行で九段物である。出雲としては尠く世話物であつて、濡髪長五郎・放駒長吉の二侠客の事件と山崎與五郎・遊女吾妻の戀愛事件とをからませて居る。以上の四曲とも並木千柳・三好松洛との合作であるが、千柳・松洛は出雲の門人であり、構想の大體の用意は出雲の力に出でたものと思はれるのである。

近松半二  
出雲が活躍した後、淨瑠璃は上方に於ては次第に衰微して來たが、竹本座に近松半二が出て

や、復興の氣を生じ、江戸に於ては平賀源内によつて最後の光を擧げた。半二は儒者であり醫者であつた難波土産の著者穂積以貫の子である。半二が淨瑠璃作者として名をつらねたのは寶曆元年からであり、天明三年に五十九歳で歿する迄筆を執つたが、その間の作が外題年鑑に五十餘曲見えてゐる。それらの中には彼一人の單獨の署名あるものもあり、合作もあるが、單獨の署名のあるものは晩年の作三・四に止まり、其の他は合作である。例へば關取千兩轍は明和四年の興行で、半二・松洛・竹田文吉・小出雲・竹田平七・三郎兵衛の合作であり、傾城阿波鳴門は明和五年の興行で、半二・平七・吉田兵藏・文吉・三郎兵衛の五人の合作である。安永九年晩年に近い頃の作である。おそめ 久松新版歌祭文は半二の單獨作である。この他彼の作で多く行はれるものに本朝二十四孝と妹背山婦女庭訓とがあるが何れも合作である。本朝二十四孝は明和三年の興行で五段物であり、武田信玄・上杉謙信に材を取つて、謙信の娘八重垣姫の勝頼に對する戀慕、器量すぐれた山本勘助のことなどを扱つて居る。妹背山婦女庭訓は明和八年の興行であり、同じく五段物で、藤原鎌足が蘇我蝦夷・入鹿を滅した事件を主題として、大判事清澄の息久我之助清船と定高の女雛鳥との戀愛の葛藤を扱つて居る。其の他明和三年興行の太平記忠臣講釋は赤穂事件を扱ひ、安永九年の新版歌祭文はお染久松の戀愛を扱つて居る。

半二は出雲の作風を更に進めて構想の變化と複雑とを求めたので、その極全體を支離滅裂ならしめた弊は免れないが、流石にその間に舞臺演出上の効果を思はせるものが多い。

並木宗輔

福内鬼外

豊竹座の方では並木宗輔の如きすぐれた作家があつて、北條時頼記・一谷嫩軍記(寶曆元年)の如き作もあるが、次第に淨瑠璃は衰へて來たのである。而してすべての文運が東遷しつゝ、ある此の期に於て、淨瑠璃も亦江戸に於て掉尾の華を開いた。それは風來山人福内鬼外であつて、彼はその奔放なる奇才を此の方面にも向けたのである。明和七年に興行された神靈矢口渡が彼の最も傑れた作と稱せられてゐる。

斯の如く淨瑠璃の次第に衰へて來た事は、歌舞伎にその生命を奪はれていつた事も一の理由であるが、一方には、所謂歌淨瑠璃といふ音樂的性質を主とするものに發展していつたのである。かくて歌淨瑠璃としても初めは河東節・一中節の如く謠曲の名残を止めて居る素樸なものから、豊後・常盤津・富本・清元・新内といふ様に次第に、繊細な、粹や意氣を表した曲節になつて來たのである。かくの如くなると共に淨瑠璃の内容は殆ど顧みられずに、たゞ滅入るやうなその哀調の中にひたる事に中心の興味を見出したのである。

歌舞伎

歌舞伎は既に古くから行はれ、元祿時代にも狂言本は作られて居たが、中期に於ては津打治兵衛が江戸に歌舞伎脚本作者として出で、堀越菜陽・金井三笑は寶曆から安永にかけて活躍し、次いで菜陽の門に櫻田治助が出た。津打治兵衛は大阪の俳優の子であつたが早く江戸に下り、江戸で名を成したのである。寶曆十年七十八歳で歿した。

並木正三

是等は江戸の作者であるが、大阪に於て並木正三や、その門から出た並木五瓶があつた。正

三は**傳奇作書**によると、大阪の道頓堀宗右衛門町に住んだ高砂屋平左衛門といふ菓子屋であつたが、若き頃から劇場を好んで、淨瑠璃作者の並木宗輔に入門して歌舞伎狂言を數多著した。其の作には**桑名屋徳藏入舟囃**・**三千世界商賣往來**・**日本第一和布苜神事**・**三拾石體始**等があり、安永二年に歿したのである。

並木五瓶

並木五瓶は正三の門から出て天明・寛政頃の作者である。初め大阪で作者として立つて名を擧げ、寛政六年に江戸へ出たが、更に十一年に大阪へ歸り、澤村宗十郎と結び、再び享和年間に宗十郎等と江戸へ出た。從來江戸では勇壯な藝が行はれたのであるが、五瓶が江戸へ出てから上方風の作風を加へて來たのである。彼のすぐれた作は**五大力戀絨**であつて、寛政七年の興行であり、大當りをとつた。お萬源五兵衛と早田八右衛門の五人斬とを結びつけて脚色を加へてある。又**金門五山桐**（樓門五山桐）も彼の作である。

奈河龜助

正三の弟子に奈河龜助がある。もと奈良の産であつて放蕩のために家業を捨て、河内の縁家に食客して居た中にも常に遊里劇場に通ひ、後大阪で作者となつた人である。奈良と河内とに漂泊したために奈河と稱すると**傳奇作書**に見える。彼の作の中**競伊勢物語**・**伊賀越乘掛合羽**・**加賀見山廓寫本**等はすぐれた作である。この龜助の高弟に奈河七五三助があり、又七五三助の弟子に奈河篤助があつた。

かくて中期には江戸と大阪との兩地に作家があつたが、漸く江戸が中心となつて來たのであつて、この機運の中から後期に於て鶴屋南北や古河黙阿彌が生れたのである。さうして歌舞伎脚本が文學的に價值ある作品を出だすに至つたのは後期に於てである。

### 三、鶴屋南北と古河黙阿彌

近世の後期に於ては淨瑠璃は既に衰へ、歌舞伎が全盛を極めたが、その作者としては鶴屋南北が中心となつて居る。

鶴屋南北

鶴屋南北は勝俵藏といつたが、後南北を繼いで立作者となつた。**傳奇作書**によれば「肚裏に一字の文學なければ、狂言に一流あつて、入組みたる出し物なれど、筋からみ合ひて新しく、これを生世話と稱へて其の頃に叶ふ」とある。其の上松本幸四郎・坂東三津五郎・岩井半四郎等の俳優と呼吸を合せて人氣を得たのである。文政十二年七十五歳で歿した。**東海道四谷怪談**・**お染久松色讀**・**隅田川花御所染**の如き傑作とせられるものであるが、殊に**東海道四谷怪談**は彼の特色をよく表して居る。**東海道四谷怪談**は南北が文政八年七月中村座で三代目尾上菊五郎のために二番狂言として新作したものであつて、（一番狂言と二番狂言とに分けて一番目には時代物を出だし、二番目には世話物を出だすのである）お岩を中心とした怪談を扱つて居る。この怪談は**風雲集**に見える青々園氏の説によれば、三つの説話を根幹として居る。即ち一はお岩の事件であつて、寛文年中四谷左門町の御手先組頭諏訪左衛門の組屋敷で、其の組下の同心田宮又左衛門の娘お岩とい



默阿彌は通稱は書村新七、初め二世河竹新七といつたが後默阿彌と改めた。江戸日本橋の質屋吉村勘兵衛の子で文化十三年に生れて居るが、矢張少年時代から芝居を好んで、十七歳の時ある貸本屋の小僧となり、十九歳で五世鶴屋南北の弟子となつて見習作者となつたのである。天保十四年二世河竹新七を襲名した。三十歳の時河原崎座の立役者となつたが、彼が自ら一部の脚本を書く様になつたのは嘉永四年三十六歳の頃からで、極めて多い。嘉永安政の時代には小團次と結んで任侠のある盗賊を多く描いた。彼の傑作と言はれる文久二年に書いた村井長庵巧破傘の如きは、悪に徹した人物を書いて任侠の所は少しも見えないが、なほ最後には悪を悔悟して居る。三人吉三・鼠小僧・髮結新三・十六夜清心の如き、何れも任侠な白浪を中心として居る。そこに悪の華は咲きにほふが最後に善によつて統一せられて居る。默阿彌に就いては次篇にも説くであらう。

## 第五篇 最近世文學

### 序 説

前期

明治時代の文學はそれ以前の文學と異なつて、西洋文學の影響を受けて内容を深くして來た。この意味からこれを三期に分つて觀察すると、前期は明治初年から明治十九年坪内逍遙氏の小説神髓の出る頃までであつて、これを歐化主義の時代といふことが出来る。この時代は新しい西洋思想の輸入によつて、歐化主義の極端に現れて、英國風の實利的傾向とキリスト教的博愛の精神と自由民權の思想によつて過去の日本を破壊してしまはうとした時代である。又一面には詩歌・小説・劇の各方面に翻譯が現れるとともに政治小説が行はれて青年の理想を作品として表現した。しかし未だ外面的粗野であつて個性的な繊細なる感情を捉へる事は出来なかつた。而してたゞ批判的な見地もなくして西洋思想を讚美したのである。もとよりこの風潮の間にも、舊文學の傳統の流れは假名垣魯文の小説や古河默阿彌の脚本にも見られ、宗匠風の俳句や堂上風の和歌の流れにも残つて居るが、一般の傾向としては西洋讚美となり過去の美しい價値あるものをも亡し盡さうとしたのである。而して中期は明治二十年頃より明治三十四五年迄であり、

中期

浪漫主義の時代ともいへる。この期の文學は前期の皮相なる見地から個性的意識に目覺め、西洋思想と固有思想との融合の下に新しい文學的活動を始めたのである。小説に於ても寫實殊に心理描寫を唱道して坪内逍遙氏や二葉亭四迷が出で、尾崎紅葉を中心とした硯友社と幸田露伴氏とが對立し、更に泉鏡花・川上眉山・廣津柳浪・樋口一葉諸氏によつて觀念小説・深刻小説など作られたが、その根柢にはなほ浪漫的傾向が存する。これは詩歌の方面に於ける文學界一派の詩や島崎藤村氏や土井晚翠氏の抒情詩に於ても見られ、又落合直文より明星派の歌の傾向に於ても見られる。この時代に起つた新派劇や史劇の如きも皮相なる寫實の上に起ち、若しくは理想主義・浪漫主義の上に立てられたものである。斯の如くこの期の文學の主潮は浪漫主義的傾向であつたのである。

## 後期

後期は明治三十五六年から明治の末年に至る自然主義の時代である。此の期の文學は眞の現實の上に立脚して物の真相を捉へんとした。是にはフランスのモウバッサン・ゾラ等の影響が著しいが、小説に於ける國木田獨步・島崎藤村氏・田山花袋等の自然主義運動は、明治文學のみならず日本文學の一大革新運動と言ひ得る。かくて美を中心とした文學が眞の上に立脚するに至つたのである。是は長詩の上に於ける象徴詩、劇の方面に於ける社會劇・思想劇などと相呼應する。しかし自然主義の文學は餘りに現實の醜をのみ求めて人生そのものの全部を眺める態度に缺けて居たために、そこに不滿を感じてやがて衰へてしまつたが、この運動の起つた事は極め

## 明治以後

て注意すべき現象である。

明治時代の後に來たのは大正時代の文學、即ち、自然主義の上に立てられた人道主義・新理想主義的傾向又は新現實主義的傾向の文學であつて、現實の醜を認めたと上でその上に理想を建設せんとする、或は現實に人性の上から一の解釋を加へようとする、即ち、人性の基礎の上に立つて居る所に明治時代の第二期の浪漫主義と異なる所がある。これは小説に於ける武者小路實篤氏や菊池寛氏の作品、長詩に於ける民衆詩的傾向や短詩に於ける新寫實的傾向などに於ても見る事が出来る。而してこの機運から更に新なる開展の道を辿らうとするのが現在の状態である様に思はれる。こゝでは最近世即ち明治時代の文學を思潮と、詩歌・小説・戯曲のそれ々に分つて主なる作品作家を解説して置く。

## 第一章 思潮概観

## 一、啓蒙思潮

明治の第一期には外來の思想が輸入され、それらの思想に國民は心酔したのであるが、その主な思想を代表する著書を擧げて解説を加へる。第一はイギリスの功利主義思想であり、第二はルソーの民約論に現れた自由思想であり、第三はキリスト教的思想であり、第四はドイツの

國家主義的思想である。第一の功利主義思想は福澤諭吉を中心として居るが、彼はどこまでも功利主義的立場に立脚して居り、慶應義塾を開いてこれを鼓吹するとともに、新しい學說を多くの平易な著書によつて世に傳へたのである。彼の著書は極めて多く、福澤全集五冊を成して居るが、當時に於て最も行はれ、影響の多かつたものは、**學問のすゝめ・西洋事情・世界國盡・空** **理圖解**等である。**學問のすゝめ**は明治五年から九年に至る間に出來、十七篇から成つて居る。

學問のすゝめ

此の書の中に彼は學問そのものの立場を明かにして居るのである。人間はすべて平等であるべきであるが、賢い者と愚かなる者の生ずるのは學問すると否とによつて分れる、故に我々は學問をしなければならぬ。而も學問は「唯むづかしき文字を知り、解し難き古文を讀み、和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文學を云ふにあらず」として、「専ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり」と言つて居る。この實學は彼の立場の根本であり、英國風の功利說の思想を繼承した事を示して居る。彼は深遠なる學理をも啓蒙的に説き、民衆化を努めたのである。而して彼の實學とは人生そのものをよりよくする事に努めるのであつて、學問のための學問は第二義的のものである。而も彼は人生をよりよくする事は、精神上の豊かさよりも物質上の裕かさによつて得られるとした。かくて從來の物質を輕んずる態度より解放せしめて、生活そのものの充實を計つたのである。而して各の生活を充實せしめることによつて、獨立自尊の精神を鼓吹した。この功利主義的立場を高唱するとともに、彼は西洋に關する知識を一般に傳へ

たのであつて、**西洋事情**は西洋の政治その他の萬般の知識を記述したものであり、**世界國盡**は「世界は廣し萬國は」の如き七五調を以て、世界の國々の歴史地理を語つたものであつて、是によつて西洋の事情が一般國民の間に廣く注入されたのである。福澤翁の著書は極めて平易であるが、時代を啓發するには與つて力あつた事は言ふまでもない。がもとより高遠なる精神の世界には觸れ得なかつたのである。

民約譯解

第二のルーソーの自由思想は中江篤介の**民約譯解**によつて傳へられた。**民約譯解**は漢文で譯して是に解を施してある。始めに本卷旨趣として、人の原始的狀態は物の取捨を己のみに依つて、人の處分を仰がなかつたのであつて、是を自由の權といつたが、今はすべてが束縛されて傭人よりも甚しい。しかしその自由の權は天の我に與へる所である。而もそれを壓迫する現社會は天理に本づかないとし、次に家族、強者之權、奴隸、終不可不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>約爲<sub>二</sub>國本<sub>一</sub>、**民約**、君、人世、土地等の各方面から説いて居るのである。この立場をとつたものに馬場辰猪の**天賦人權論**があり、人の權利は天の與へたものであるといふルーソーなどと同じ流である。この自由思想はこの時代の政治の上に非常な影響を與へた。

基督教的精神

第三に新島襄等の基督教的精神は注意すべき思想的影響を與へて居る。日本に基督教の渡來したのは、歴史的に見て戰國時代からであるが、思想的にこれが受け容れられ、眞面目なる人生探求の結果として、信仰せられるに至つたのは、明治初年からであるといふ事が出来る。明



治初年熊本藩の學校に於て米國の大尉ジェーンズをして洋學を教へしめたが、この感化によつて熊本に基督教を信する者が多く出た。而して新島襄は明治八年に同志社を開いた。襄は岩倉大使の通辯として西洋を漫遊し、歸來佛教の盛んな京都に於て是を開いて燃ゆるが如き信念を以て基督教を鼓吹し、**六合雜誌**を機關として熱烈に論議した。

第四はドイツ學派の影響を受けた國家主義であつて、加藤弘之の如きはその代表者である。加藤弘之は最初は天賦人權説を唱へて自由平等の思想をとつたのであるが、進化論の感化によりその説を改めて、人は平等でない<sup>と</sup>唱へ、**人權新説**を著してこの思想を主張した。

この進化論的國家主義に對しては自由思想のみならず基督教的博愛の思想も反對の立場に立つものであつて、その論争は第二期にまで亘つて居る。

## 二、日本の思想の自覺

二十年代の日本の自覺

第一期は外來思想を謳歌し、これに心酔した結果、固有の國民思想生活を破壊しようとしたに反して、この期に於ては國民的意識が目覺めて、外來思想と調和しようとするに努めたのである。この國粹的機運が浪漫主義的時代には一貫して動いて居るのを認められる。二十年代に於ける啓蒙的國粹主義と、三十年代の初期に於ける思慮的**日本主義**とは是れである。而して二十年代に於けるこの國粹主義は種々の運動となつて現れたのであるが、最も注意すべき現

象は、第一は國家思想と基督教思想との交渉であり、第二は國文學研究の復興である。第一の國家思想と基督教思想との交渉は前期に於て既に見られた所であるが、此の期に更に甚しくなつた。明治二十一年に三宅雪嶺氏等によつて設立された政教社は、**日本人**といふ雜誌を發刊して國家主義を鼓吹し、外來思想の幾多の缺陷を指摘し、歐化主義を有する民友社に對峙して居た。而して明治二十三年に明治天皇は教育勅語を賜うて國民道德のよる所を示し、國民思想を確立せしめられた。井上哲次郎氏は明治二十五年に**教育と宗教との衝突**といふ書を著してその國家主義的立場を闡明し、一方矯激に亘つた基督教を排撃した。このために横井時雄・植村正久等は大いに反對して論戦したが、國家主義と相反するが如き意味を有する基督教思想は次第に衰へて行つたのである。

この國家主義とともに一方に第一期の西洋心酔から醒めて國文學の勃興となり、落合直文等の**日本文學全書**の刊行などに依つて過去の文學が一般に擴められ、また紅葉・露伴等の作家によつて西鶴等の近世文學も研究せられるに至つた。

高山樗牛

而して三十年代に於ては啓蒙的の國粹主義から次第に思慮的に進んでいつた。高山樗牛等によつて唱へられた日本主義はこれを代表するものである。樗牛は二十九年に大學を出でてからその華やかな才筆を以て論壇に活躍した。雜誌**太陽**は彼の據る所であつた。その第一に唱へた日本主義は可なりに世の注意を惹いた。彼は日本の國民性の特性を察して、それに基づいて道

徳を定めようとするのであるが、その本質的な所は從來の考へ方と餘り異なるものではない。かくてこの日本主義に對する非難も出でたが、とにかく當時の思想界に於ける注意すべき現象であつたのである。樗牛等の日本主義は國民道德を基礎にして居るために當然の歸決として倫理研究が盛んに唱へられて、樗牛もこの方面に入つて倫理的立場から時代の墮落を慨したのであるが、逍遙氏の如きも三十一年に早稲田文學を廢刊して一時文壇を退いて社會教育の方面に力を盡した。然しながら此の如き倫理研究が彼等をして十分なる思想的確立を得しめなかつた爲か、やがて彼等は何れも倫理的探求から離れていつた。網島梁川が倫理から宗教研究に向つたのもそれであるが、樗牛等によつて唱へられたニイチエ主義はことに著しきものである。即ち國家主義から一轉して個人の心靈とか天才の精神を重んずる立場をとるに至つた結果、權力意志を主張して勇敢に戦つたニイチエにその具體的な姿を見出だしたのである。



高 山 樗 牛 像

樗牛が國家主義から個人主義に變化した事はこの時代の注意すべきことである。浪漫主義が漸く頹廢的になつてそこに世紀末的な思潮を示して居るのであつて、更に第三期に於ける實證主義的思潮の起る事を暗示するものと思はれる。而して樗牛自身から言へば、ニイチエから更

に同じく強い自我を貫いた日蓮に移り、そこに彼の最後の光を見出だしたのである。

### 三、自然主義的思潮

自然主義

浪漫主義が漸く頹廢的になり、空想的な憧憬や理想が得られざる夢であつたと氣付いた時、そこにすべての理想の破壊された後の幻滅があつた。自然主義的思潮はかくして起つたのである。すべての美を捨ててたゞ眞なるものの探求に向つたのである。此の如き思潮を導き出したのは唯物的な實證主義的精神・科學的精神に據る所が多いのであらう。かくてシエリイやキイツの詩から、ゾラやモウパッサンの小説に移つて來たのである。而してこの自然主義を評論の上に於て主張したのは島村抱月・長谷川天溪氏等であつた。殊に抱月は穩健冷靜な態度で條理備はつた論文に於て自然主義を主張した。「自然主義の價值」・「文藝としての自然主義」を初め彼が自然主義のために論じたものは多い。それらに於て自然主義の態度方法の上から見て純客觀的であることを唱へ、目的題材の上から自然の眞を捉へること、換言すれば社會問題・科學・現實等に現れた眞を捉へることを唱道して居るのである。この自然主義の主張が空想的な世界から離れて現實に立脚し、その眞實をつかむといふ所に根本の精神があるのは、動かすべからざる確乎たる立場であつて、この主張の前には過去の文學や思潮は何等の反對をもなす事は出来ない。自然主義の現實觀照は眞理と妥當との上になつて居る事は明かであるが、併しなほ現實に

對する餘す所なき觀照と言ふ事は出来ない。現實には醜い厭ふべき事が多い。利己と争闘との世界、肉慾と虚偽との世界のある事は事實である。しかしそのみが人生の全部ではない。破壊の側には建設がある。利己と争闘との側には愛と平和とがある。惡の中に善を見出だし、悲の中に喜を見出だし、絶望の中から理想の光が輝くであらう。かくて自然主義の中心勢力をなした時代にも後藤宙外氏の如き反對者もあつたが、やがてこの自然主義から醒めて、現實の上に立つた理想の建設への道程を辿るに至つた。併し自然主義によつて始めて現實の上に力強く立つことを知つた。即ち眞なるものの上に立つ事を始めて知つたのである。空想的な美にあらがれた夢から醒めて、眞の美をつかむ第一歩を教へられた事に於て大きい意義があるのである。而してこの思潮が文學作品の上に與へる影響も大きかつたのである。

## 第二章 詩 歌

### 一、新體詩の發生

初期の和歌俳句

明治時代の詩歌としては和歌・俳句の外に新しい形態としての新體詩・長詩がある。さうして初期に於ては和歌は香川景樹派の堂上風の歌が勢力を占め、御歌所には高崎正風を中心として海上胤平・松波遊山など歌人は少くなかつたが、それは從來の月を弄び花に吟する態度を以て進

んだのであり、生々とした感情からは遠いものであつた。俳句を見ても蕪村・一茶の後、鮮明に個性を表現する俳人なく、所謂宗匠風の傾向に流れたのであつて、それらの中其角堂永機・春秋庵幹雄の如き初期の俳壇の代表者たるべきものも因襲的な態度を持するに過ぎなかつた。むしろこの期に於ては新體詩の發生した點に文學史的意義が多く見出される。

新體詩の發生

新體詩は明治十五年に外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎三氏の「新體詩抄」によつて、新しい形式が創始されたのである。それにはテニソン・ロングフェロー・キングスレーなどの詩の譯が主であり、グレーの挽歌やシェークスピアの「ヘンリー四世」や「ハムレット」の一節なども譯されてある。また自作の詩もある。形式は七五調であるが、まだ言葉の洗練されない詩味の乏しいものである。例へば「ハムレット」の一節でも

ながらふべきか但し又	ながらふべきにあらざるか
こゝが思案のしどころぞ	運命いかにつたなくも
これに堪ふるが丈夫か	又さはあらで海よりも
深き遺恨に手向うて	これを晴らすがもののか

の如く言葉の穉拙蕪雜を見る。一體に抒情詩には理智が勝つて感情の純粹さが見られないのであるが、敘景詩にはこの點が尠いために見るに足るものがある。グレーの挽歌の譯詩の如きは秀作の一とすべきであらう。

山々かすみいりあひの 鐘はなりつゝ野の牛は  
 徐に歩み歸りゆく 耕す人もうちつかれ  
 やうやく去りて我ひとり たそがれ時に残りけり  
 要するに未だ生硬を免れないが、此の如き新しい詩形が行はれるやうになつた所に注意すべき  
 ものがある。

湖底子 弘

二、新體詩と長詩

長詩

後期以後に於て明治文學はすべての方面に勃興したのである。先づ詩歌の方面に就いて述べよう。長詩に於ては、**新體詩抄**に依つて新體詩なるものが創始せられてから二十年代の終には早藤村・晚翠兩氏に至つて、ほゞ一の完成にまで導かれた。その間にも種々變遷はある。第一は落合直文・山田美妙・宮崎湖處子等によつて試みられた表現上の改革である。**落合直文**は明治二十一年に井上哲次郎氏の漢詩を譯した「孝女白菊の歌」を發表したが、流石に詞句は洗練せられて流麗の調は愛誦に値した。また山田美妙は明治二十年に尾崎紅葉・丸岡九華等と**新體詩選**を著し、更にその後も**國民の友**や**いらつめ**等に詩作を發表した。美妙はその小説に於けると同様に清新な格調を有し、「つばすみれ」の如きには民謡調を加へて可憐の情緒が見えてゐるが、輕妙といふだけで深みはない。宮崎湖處子は明治二十三年の歸省によつてその詩才を認められて

○山田美妙

宮崎湖處子

居る。是等に於て格調の整へられて來た事は明かであるが、その思想・感情の上には未だ新しいものはなかつた。

中西梅花

中西梅花・森鷗外・北村透谷等に見ると、感情の上に新しいものを産出さうとしてゐる點が見られる。中西梅花には明治二十四年に**新體梅花詩集**が作られて居る。その感情には個性的な力

森鷗外



紙表の(筆主外鷗森)紙草みらがし

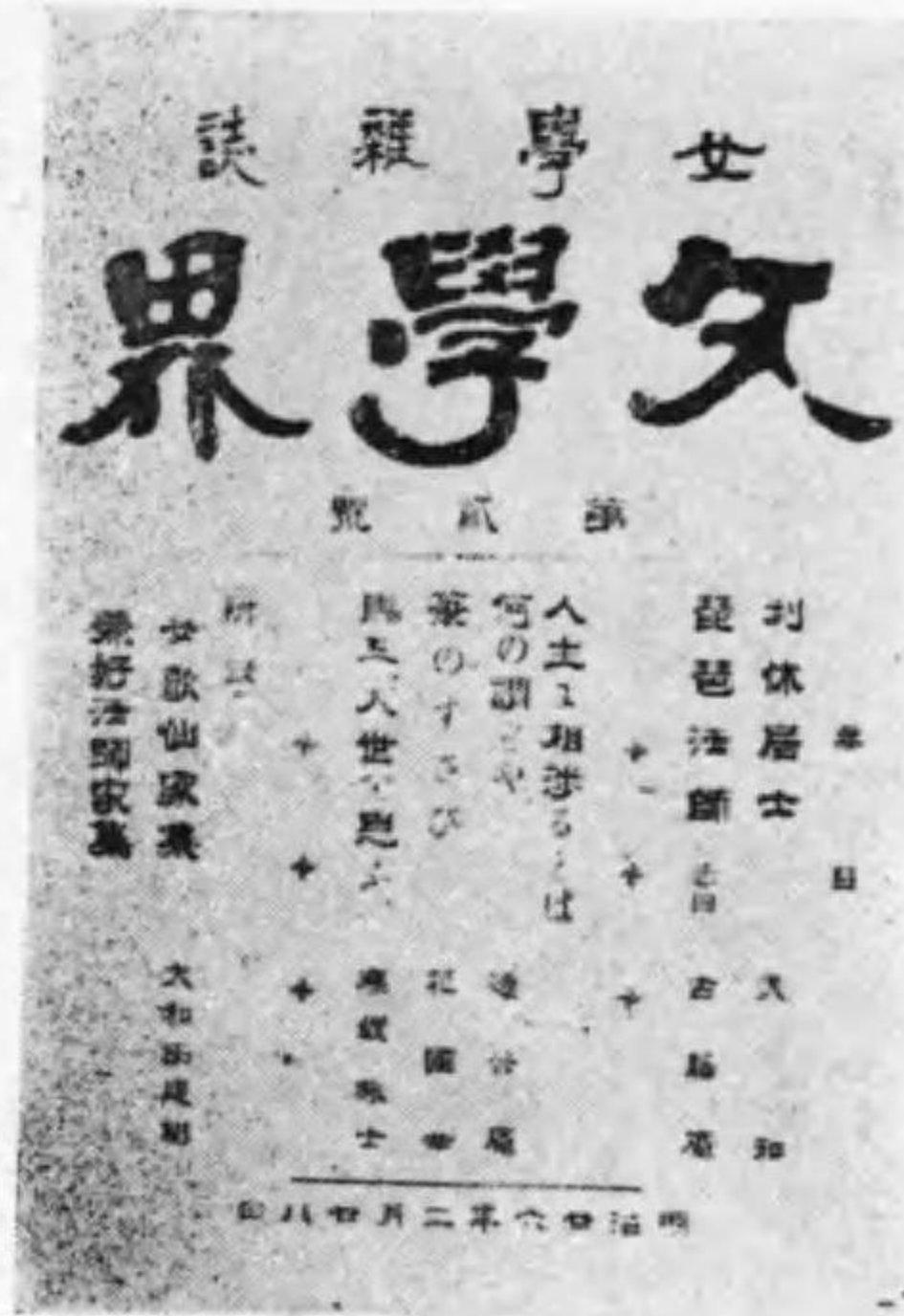
強さはあるが、表現には未だ完成しない點が多い。此の時代に注意すべきは森鷗外のSS社の譯詩**於母影**である。形式上にも種々の試みをなして居るのみならず、感情・内容に於て從來の常識的若しくは智的の内容と異なつて、近代的な幽鬱をうたつて居る所に注意せらるべきものがある。

北村透谷

この幽鬱な感情を詩にうたはうとしたものに北村透谷がある。彼の詩は「蓬萊曲」といふ劇詩と他に「楚囚の詩」「蝶のゆくへ」「雙蝶のわかれ」等の短章を有するに過ぎないのであつて、その形式表現ともに未だ烹練を経ないものであつたが、理想と現實との葛藤と、その理想の壞されてゆく経路とを語つて居る。なほ明治二十八年には外山博士・上田萬年博士等の**新體詩歌集**が作られ、散文詩といふべき詩が提唱された事は注意するに足りるが、未だ詩として圓熟して

鳥崎藤村

二二二  
あなかつた。以上の様な種々の試みは鳥崎藤村氏の**若菜集**によつて完成された。**若菜集**は明治三十年に刊行され、二十九年頃の藤村氏の詩を集めてあるが、五十篇程の詩に於て青春の感情のあらゆる相を描きつくして居る様に考へられる。その形式は七五調を主としてあるが、いかにも完成したものであり、その感情は優雅と哀愁との溶けあつた、しんみりした情趣を中心としたものである。



三十一年の**一葉舟・夏草**、三十四年の**落梅集**に降るに従つて、青春の感情から、次第に行爲の方に轉向する趣が見えた。それは**若菜集**の中にある「深林の逍遙」に見えるやうな瞑想的な詩風、「鶏」に見えるやうな勞働をうたひ生活をたゝへるといふ傾向であつた。而して「鶏」の傾向を進めて、遂に彼は詩を去つて小説に入つたのである。

土井晩翠

藤村氏と並んで土井晩翠氏は漢詩から得た雄渾なる格調と瞑想的な傾向を以て詩壇に並び稱せられた。彼の詩のまとまつたのは明治三十二年に出た**天地有情**であるが、その中の「星落秋風五丈原」といふ諸葛孔明をうたつた長篇の詩を見る時、意氣に感じて主の遺孤を守りたてた彼が、病篤きに及んで經て來た辛苦の跡を思つて、感慨に沈む悲壯な心持が現れて居るのであ

る。が細かな感情のリズムを感じる事は出来ないと思ふ。又瞑想的である「萬有の詩人」といふ篇をとつて考へて見る時何となき深みのあるやうにも思へるが、なほ詩的感情の深さを十分に感ずることは出来ない。然しその洗練せられた雄渾なる格調は唱すべきものである。殊に物語詩若しくは譚詩と稱すべき長篇の詩に於て、壯美なる格調を巧みに運んで、全體の統一をほぼ得しめたのは何人の感覺に訴へても快いリズムを残すものであつて、この時代の浪漫的な傾向とよく合致して居る。氏は明治三十四年に**曉鐘**を出だして居るが、氏の作風は固定して心境の開展を示すものが殆どない。明治三十九年に出た**東海遊子吟**も同じ詩風で、而も**天地有情**ほどの情熱も見えないために殆ど顧みられずに終つた。

奥謝野鐵幹

この藤村・晩翠二氏の時代に於ては他に幾多の詩人を見る事が出来る。奥謝野鐵幹氏はその一人である。明治二十九年に**東西南北**を著して居り、三十年に**天地玄黄**を出だし、更に三十四年の**むらさき**、三十五年の**うもれ木**を始め多く刊行されて居る。彼の詩は彼の歌の如く雄渾の調はあるが感情は粗雑であり、晩翠氏の瞑想的な所も見られないのである。所謂ますらをの歌と自らも言つた如く男性的な意氣と力とが見られる所に特質がある。然し後に至つては短章の中に情趣のたゞよつて居るものを見るのである。要するに彼は意氣と才とを以て詩を作つた人である。岩野泡鳴も亦その一人である。生硬であり詩味に乏しいが、思索をそのまゝに詩として表現しようとした所に特色があり、また詩形の上に種々な試みをなして居るのも注意すべ

岩野泡鳴

薄田泣菫

きである。彼は利那的表象を唱へて自然主義的傾向を多く示してゐる。

藤村・晚翠二氏の後を受けて詩壇を代表したのは薄田泣菫氏と蒲原有明氏とである。泣菫氏が始めて詩壇に立つたのは明治二十九年頃であつて、明治三十二年には最初の詩集である**暮笛集**を出だし、更に明治三十四年には**ゆく春**を出した。故に藤村氏の時代に、氏は既に詩人としての力を發揮して居るのであるが、感情の單純にして何人にも入りやすい藤村氏等の詩の重んぜられた時代には彼の詩は多く注意せられるに至らなかつた。もとより藤村氏の如く完成せる境地には到達して居ないが、その未完成の中に新しい感情を、新しい形のもとに表現しようとした努力が見られる。即ち詩形を見ても藤村氏の如く七五調を中心とせず、**八六調**を好んで用ゐて居る。

鳥鳴く柿の實紅をさして

夕日に浴びたる上枝高く

首ふる尾をふる興に入りて

歌ふよ山雀律も優に

(山雀)

七五調の如く一般的感情にひきずられる事もなく、又**泡鳴**の十音詩の如く斷續的になる事もなく、その感情を自由に盛り得てゐる。泣菫氏の感情は重々しく又複雑である。**暮笛集**の「**尼が紅**」の如きは長篇で敘事的傾向を持つてゐるが、その間になやましき官能的な情緒がたゞよつ

て居る。**ゆく春**に至つては**暮笛集**に見える生硬な用語の未熟も失はれて、重苦しき中に落着きを見せ、世を呪ふ聲、沈鬱なる人生に對する悲嘆が強く現れて居るのである。而もその中には「**石彫獅子の賦**」の如き藝術の永遠性をうたつた作品もある。泣菫氏のこの傾向は次の期に於て**白羊宮**によつて象徴詩的傾向を開拓していつた。

蒲原有明

泣菫氏と并べられる蒲原有明氏もまた既に明治二十七年頃に詩を發表して居つたが、その處女詩集**草わかば**を出したのは泣菫氏の**ゆく春**よりも遅れて明治三十五年である。彼が詩壇に反響を與へたのは翌三十六年に**獨絃哀歌**を出だし、更に三十八年に**春鳥集**を出だし、佛蘭西象徴詩の影響を受けて象徴詩運動を起してからである。彼の詩は泣菫氏よりも更に複雑な情操の世界に入り、その表現は殊に幽玄難解である。彼は泣菫氏の八六調から更に進んで一種の詩形を創造した。

道なき低き林のながきかけに

君さまよひの歌こそなほ響かめ

歌ふは胸の火高く燃ゆるがため

迷ふは世の途倦みて行くによるか

(あだならまし)

連續して盡きない情緒の戦慄が見えるやうな詩形の中に、複雑な近代的情操を盛つたのが彼の詩であつたのである。**草わかば**に於ては詩形は多くは未だ七五調であるが、**獨絃哀歌**はこの新

詩形を試み、また**草わかば**のやうな幽遠なしかし若々しさを持つ戀愛の境から、人生の憂鬱や寂寥の世界へ奥深く進みいつて、それを感覺的に表現しようとした點に既に象徴詩的な傾向を示して居る。

上田敏

かくしてこの傾向は更に發展して、明治三十八年には有明氏の**春鳥集**が作られ、上田柳村の譯詩集**海潮音**が出るに及んで、象徴詩は詩界の中心となつた。次いで三十九年には泣菫氏の**白羊宮**も出でた。是等に於ては氣分情調が象徴的に表現されて居る。**海潮音**の

秋の日の  
ギオロンの  
ためいきの  
身にしみて  
ひたぶるに  
うら悲し  
鐘のおとに  
胸ふたぎ  
色かへて

涙ぐむ  
過ぎし日の  
おもひでや  
げにわれは  
うらぶれて  
こゝかしこ  
さだめなく  
とび散らふ  
落葉かな

(落葉、エルレニヌ)

三木露風

の如きは譯詩ではあるが、その傾向を代表して居る。これよりやゝ遅れて三木露風氏も象徴詩人として活躍した。露風氏は軟かな感觸の中に細かい氣分を表して居る。**白き手の獵人**の中にある「雪の上の鐘」の

心の上に暮れ方の  
雪はしづかにふりつもる  
灰色にしてあぢきなく

やはらかにふるへつゝ  
の如き、氏の特質を見ることが出来る。

以上述べたやうな象徴詩は長詩に於ける一の態度として長く勢力を有して居るが、一方に民衆詩的傾向が出でて來た。有明氏も始めの難解な詩風から口語詩なども作つたが、この傾向は更に民衆的な傾向へ向ふ機運を示すものである。自由詩社が起り、相馬御風氏が口語詩をうたつたのは明治四十二年であつた。

### 三、和歌と俳句

和歌

次に中期以後に於ける短詩を考へるに、先づ和歌は落合直文の短歌革新から始まつて居る。直文の長詩は思想に特に新しいものはなかつたが、その表現に於て清新なものを作りあげたのである。彼は和歌に於ては長詩に於けるよりも一層はつきりした新機運を導き出したが、なほその特質は清新なる表現にあつて感情や物の見方の上に新しいものを多く求めることは出来ないのである。もとより堂上派から見れば内容に於ても新しい所があるが、特に明治の新空氣を見出だす事は出来ない。しかし氏が多くの門下を養成して短歌の革新を遂げさせた功勞は認むべきものである。明治二十六年に淺香社を組織してから與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟・鹽井雨江その他多くの歌人がその門に輩出した。

與謝野鐵幹

明治和歌史の上に最も注意すべきは與謝野鐵幹氏である。鐵幹氏の東西南北は明治二十九年に出で二十年代の歌を集めてある。彼の歌は所謂男性の歌と自らも稱する如く雄健ではあるが感情に粗い所がある。しかし格調はよくと、のつて快い旋律を感ずることも無いではない。且つ三十年代に入ると次第に變化して來て繊細な感情も表現されるに至り、與謝野晶子氏とともに明星派全盛時代を作り出だし、その浪漫的傾向を鼓吹した。東西南北時代の

韓にしていかにか死なむやまとは父もいませり母もいませり

韓にしていかにか死なむわれ死なばをのこの歌ぞまたすたれなむ

この秋も我はかへらすふるさとの川ぞひ柳ひとり散るらむ

などをこの期の

うしろよりきぬきせまつる春の宵そらや髪のみだれて落ちぬ

見かはしてふたり伏目の人わかし梅にゆづれる車と車

の歌に比すると隔世の感があるであらう。

與謝野晶子

鐵幹氏と並べて考ふべきは、其の妻晶子氏である。晶子氏は鐵幹氏の門下であつたが、詩才に於ては鐵幹氏よりも優れ明星派の中心たるが如き觀があつた。三十四年の亂れ髪を最初の集としてその情熱的な歌風を以て歌壇の驚異となつた。舞姫・春泥集など同一傾向を以て進んで居るのである。それらは與謝野晶子集三冊として刊行されて居る。晶子氏の歌は戀愛感情を中心



として居るが、彼の戀愛は強い奔放的な情緒のほとばしり出たものであつて、靜かな情趣の表現ではない。かつ彼の情緒と伴つて、肉感的・感覺的な要素が多いのを感じる。次に二三の例を擧げる。

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき

人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴にもたす亂れ亂れ髪

○是に比すると尾上柴舟・金子薫園兩氏の歌は清楚な感を有するのであるが、柴舟氏の歌には理智的傾向の伴ふを、薫園氏には自然や事象の中にひたる溫雅な態度を見得るのである。柴舟氏には銀鈴・靜夜、薫園氏には小詩國・凌霄花・伶人・我思等の歌集がある。

更に佐佐木信綱氏は落合直文氏とは系統を異にして居り、やゝ保守的傾向を有するが、浪漫的な傾向を有する歌人として擧げる事が出来ると思はれる。主觀的な歌よりも自然を眺めた歌に靜かな情趣をたへたものが多い。思ひ草・新月が此の期に作られた。

以上の諸家の抒情的の歌にはそれ／＼浪漫的傾向のあるのは勿論であるが、自然を描いた作にも主觀が濃厚であつて、靜かに自然を觀照し自然の姿をうつした點が少い。

是等と全く反對の傾向を取つた人に正岡子規がある。子規は次に述べる如く俳句に於て革新

佐佐木信綱

正岡子規

を唱へて純客觀的表現を主張したのであるが、三十年代に至つてこの態度を以て歌の上に寫生



正岡子規肖像

を唱道した。彼は「歌人に與ふる書」の中に萬葉集を中心とすべきを説いて、當時の主流であつた明星派の浪漫的傾向に反對し、鐵幹氏の態度が是ならば自己の態度は否であり、自己の態度が可ならば鐵幹氏の態度は否であると説いて居る。子規は明治三十五年に歿し、その唱道は未完成の點もあつて、この期には主流とはならなかつたが、次期に於てその系

統が歌壇の中心となるに至つた。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかさりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

與謝野晶子

石川啄木

後期に於ても浪漫的傾向はなほ勢力を保ち、明星派の與謝野晶子氏は歌壇の中心をなして居る。氏の舞姫の出でたのは明治三十九年である。しかし次第に衰へて明治四十一年に明星が廢刊したのは短歌の推移を示して居るものである。かくて一方に人生をうたはうとする石川啄木の出でて來た事は歌壇に於ける自然主義的傾向を示すものである。職業をうたひ、生活苦をうたひ、人生のまことの感情を赤裸々にうたつた所に心に沁み入るもののある事を感じる。若山

牧水が字餘りの歌をうたひ、土岐哀果氏が啄木の如く生活をうたつたのもこの傾向を示すものである。

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる  
うぬ惚るゝ友に合樋うちてぬぬ施與をすることき心に  
猫の耳を引つぱりてみてふと啼けばびつくりして喜ぶ子供の顔かな  
薬のむことを忘れてひさしぶりに母に叱られしをうれしと思へる

石川 啄木

俳句

正岡子規

次に俳句を見ると、第一期に於ては天保の墮落的傾向をそのまゝに引繼いで月並俳句が行はれたが、正岡子規が出でて再び俳諧に新しき生命を與へたのである。子規は大學時代から俳諧を研究し、後大學を半途でやめて、日本新聞によつて種々俳論を發表するとともに新しき句を唱へた。明治二十五年に癩祭書屋俳話を出だし、明治二十六年に芭蕉雜談を出だし、二十九年に俳人蕪村を出したが、彼の中心とする所は蕪村への復歸であつた。蕪村は芭蕉とともに俳諧史上最も注意すべき俳人であるが、芭蕉が蕉風の開祖として多くの門下を擁して居つたに比して蕪村は餘り多く知られる事なく、明治に至つても殆ど忘れられて居たが、子規によつてその眞價を認められるに至つた。子規の蕪村への復歸は更に一歩進んで芭蕉にまで到達すべきであつたと思はれる。事實子規にしても三十年代に至つては蕪村よりも更に一歩進んで行つたや

うに思はれる。子規の性格は理智的な明晰さがあつて、病床に呻吟したその境遇に拘らず彼の句には暗い影は見られず明るいほがらかな感じを見出だすのである。彼が蕪村を見出だしたのは彼の心境と最もよく合つて居つたためと思はれるのであつて、そこに復歸する事によつて、俳句を救つた事に偉大なる功績を認めて宜いと思ふ。

子規は小説界に於ける紅葉や歌に於ける落合直文の如く、統率と指導との才があつたので、その門下には高濱虚子氏・河東碧梧桐氏や内藤鳴雪を始め夏目漱石をも出だした。虚子氏は主觀的傾向を示し、碧梧桐氏は客觀的傾向を受繼いだすが、次の期になつて碧梧桐氏によつて新傾向句が唱道されるに至つた。

雪残る頂一つ國境 子規

島々に灯をともしけり春の海

麓田の夕日に多き案山子かな



正岡子規筆蹟及畫

猿曳を親猿と思ふ夜もあらん  
八萬の毛穴に瀧の音冷し

この日本派外の他の流派に就いて少しく考へて見るに、尾崎紅葉を中心とした紫吟社といふ一派があつた。紅葉の外に巖谷小波氏や石橋思案の如き硯友社の同人が主であつたが、此の派は蕪村などよりも談林派を模範とした。この紫吟社の外に秋聲會といふ流派は角田竹冷・戸川殘花等によつて作られ、また大野洒竹・佐々醒雪・沼波瓊音・笹川臨風氏等によつて鏡波會が作られた。

虚子と碧梧桐

後期に至つては正岡子規の系統が中心をなして居り、子規門の虚子・碧梧桐の二氏が活躍して居るが、殊に碧梧桐氏が新傾向句を唱道したのは、長詩・和歌に於けると同じく自由なる態度が俳句の上にも現れて来たことを示すものである。新傾向句は十七字句に拘束せられずうたふのであつて、その點だけでは談林派に似て居るが、談林派のやうな遊戯的なものではなく、力強い生命の表れであることを期してゐる。

長閑なる水暮れて湖中灯ともれる

碧梧桐

遠く高き木夏近き立てり疊む屋根に

鳩立つや霜に搔く藻の棹光り

水鶏來し夜明けて田水滿てるかな

虚子

燒山の夕暮淋し知らぬ鳥

蝶々の物食ふ音の静かさよ

宿かさぬ蠶の村や行き過ぎし

### 第三章 小説

#### 一、啓蒙的小説

此の期に於ける小説は此の時代の新しい思潮を扱つた政治小説が中心であるが、一方に假名垣魯文を代表とする傳統的な作品と、また翻譯小説と言ふべきものがある。

假名垣魯文

傳統的作家の方から眺めると假名垣魯文は江戸時代から明治にわたつて居る作家である。文政十二年に江戸に生れ東條文京(魯介)の門に入つたために魯文と號したのである。弘化元年に政談青砥碑を編んでから種々の作があり、滑稽富士詣十卷に於て滑稽本作者としての特質を發揮して居る。明治になつてからは新しい時代を舊式に眺めた作品を出して居り、西洋膝栗毛十篇は彼を代表するものである。この作は福澤諭吉の西洋事情などより題材を採り、一九の膝栗毛と同じ趣向のもとに彌次郎兵衛・北八といふ二人の滑稽人物を出だし、横濱の大腹屋といふ豪商に雇はれ、上海より英國に至る間に滑稽失敗を到る所で演ずるのである。新しい明治の環

政治小説

境の中にどこまでも傳統的な古い氣分を押し通して居る所に特徴がある。この外に魯文は福澤翁の窮理圖解を脱化したる胡瓜圖解を出だし、福澤翁の説いた道理を茶化して居り、又安愚樂銅を著して明治の人民が牛鍋を圍んで論議するといふ趣向を以て記して居る。いづれも題材に新しい事件を採擇して江戸人としての觀察を行つたのである。

が此の時代の小説の中心は政治小説である。政治小説は當代に於ける政治的野心に燃えた者が、己が理想を小説に託して表現したものであつて、文學としては洗練されて居ないが此の時代の思潮をよく表して居る。それらの中で經國美談・佳人之奇遇・雪中梅・花間鶯等は代表とすべきものである。

經國美談

經國美談は矢野龍溪の著であつて、齋武經國美談とあり、明治十七年一月十三日に成稿した。

明治十七年二月の藤田鳴鶴の序や森田思軒の跋がある。ギリシヤのテーベ(齋武)の勃興の歴史的事件を主として、之に多少の脚色を施した小説である。その組織を見ると、夕日が西に傾く頃ギリシヤのテーベのある少年子弟を教へる學校に於て、老教師がアテネのコードリウス(格徳)・スラスプリユス(士良武)の二名士の肖像を示して、その功績を語つたのに對して、その後年テーベのために義を盡したペロピダス(巴比陀)・イバミノンダス(威波能)・メルロー(瑪留)等を始めその一群の童子等が義に勇む心からスラスプリユスを讚美した所に筆を起し、是等の少年が青年となつた時奸黨が起つてテーベの危き時、或はアテネに行きて援を請ひ百折撓まず、ある宴會の

佳人之奇遇



(圖の關立獨) 繪挿一卷遇奇之人佳

とき女装して奸黨を殺し、テーベを平和に導いた所までを前篇とし、更に才略拔群人品優美なるペロピダスや寛弘深沈なるイバミノンダス等の力により、テーベがギリシヤの盟主となるに至る迄の事柄を記述してある。そこに武斷的專斷的なるスバルタに對し、民主的なるアテネ・テーベの態度を對立せしめて武斷を退け、民主的傾向を謳歌してあるのは、明治初年の自由の精神を最も強く表したものである。

同じく材を主として西洋諸國に取つて居るけれども、日本人の經驗として描いたものが佳人之奇遇である。此の書は明治十八年に成り東海散士の作である。會津亡命の士東海散士が世界を周遊して亡國の士に逢ひ慷慨の情を談ずるを大筋としてゐる。西班牙の幽蘭女史と英國のために虐げられた愛蘭の熱血の女丈夫紅蓮は東海散士とともに最も主要なる人物である。其の他明朝の遺臣范卿なども點出せられる。而して到る所に亡國の悲哀をとむらひ、慷慨の情を注ぐ。會話の間に叙景を挿み、

又交々詩を吟じて悲をやる如き點も多く見える。文は漢文直譯流であつて華麗であり、且つ力強くはあるが、しかし描寫は粗笨である。八篇十六卷から成り極めて大部なものであるが、たゞ亡國を嘆く感情のみ見えて人物に個性の缺けてゐる事は遺憾であり、また全體を統一する構想がない。

雪中梅と花間

雪中梅と花間鶯とは未廣鐵腸の作であり、前者は明治十九年に刊行され、後者は明治二十一年に刊行されて居る。明治十四年の詔勅によつて今より十年後を期して國會を開かうとした後數年、往年の政治熱のやゝ衰へた時の事件としてある。國野基といふ青年政治家が苦節を通して政治的に成功し、穩健なる進取派である自由黨の首領として國會議員に當選するまでの経緯を描いてある。保守黨の川岸や過激黨の武田などを點出してあるが、雪中梅ではお春といふ女性と國野とが結婚するに至る事件を結びつけてやゝ花やかである。花間鶯は國野の政治的活躍を主としたもので、作品としては情趣に乏しい。

翻譯小説

此の時代に於ては西洋思想に心酔した結果、翻譯文學も行はれたのであるが、それらのうち小説に於ては明治十一年に織田純一郎の譯した花柳春話などは初期に屬するものである。これはロードリットンのアーネストマルトラバースの譯で、譯文は極めて生硬な漢文直譯體であり、譯語も今日から見て洗練されない感がある。爾來翻譯小説は多く作られ、藤田鳴鶴の繫思談（明治十八年）、坪内逍遙氏の慨世士傳（明治十八年）の如きはリットンの作品の翻譯であり、關直彦の春

鸞囀はヂスレリーの作品の翻譯である。是等は材を歴史にとつた作品であり、明治の政治思想に呼應するものであるが、井上勤の譯した月世界旅行（明治十六年）や海底旅行（明治十七年）は科學的な題材を扱つた作品であり、そこには一面には政治的興味とともに新しき科學に對する興味をも見る事が出来る。しかし文體の如きは何れも生硬を免れないものであつたが、二十年頃になるに従つて、新しい文體もとられるやうになつて來た。それらの中で注意すべきは未松謙澄の谷間の姫百合であらうと思ふ。この作は明治二十一年から出版されて居るので、年代から言へば第二期に屬するものであるだけに翻譯の文體も花柳春話以來の漢文直譯體ではなくして流麗なる文を用ゐ、會話は言文一致で表現してある。會話の翻譯は未だ精練を誇る事は出来ないが、地の文殊に敘景には清新の趣を傳へて居る。原作は謙澄の序によれば、ベルサ、クレーといふ女性のドラ、ソルンといふ作品であつて、英國の有洲伯爵家といふ家庭の事件を扱つて居る。

## 二、中期の小説

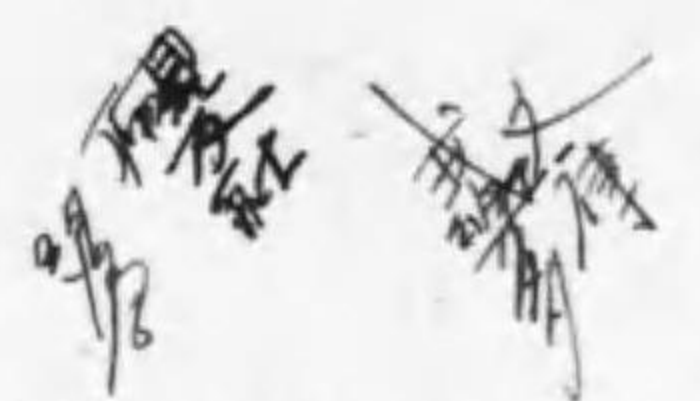
次に中期の小説を概観する。前期に於て政治小説が中心であつたが、明治十八年に坪内逍遙氏の小説神髓が成り、明治十八年から十九年にかけて一嘆當世書生氣質が出版され、更に二葉亭四迷によつて浮雲が刊行されるに及び、新しい機運が起つて來たのである。小説神髓は小説に關する考察を組織的に纏めたものであつて、これによつて小説の進み行くべき道が開かれたの

小説神髓と當世書生氣質

であるが、その所論に基づいて作られたのが書生氣質である。東京に於ける學生生活の状態を描いたものであつて、ある英學塾に於ける數名の學生を主として、豪傑風の學生や柔弱なる學生等その性格の相違を擧げて其の生活を赤裸々に描寫して居る所に、寫實的傾向が見られる。雲中梅に見える政治家の如きでなく、平凡なる書生生活がありのまゝに寫し出されてあるのであるが、しかし性格も多く類型的であり、個性の心理的葛藤よりは表面的な會話事件が主として描いてある。且つ脚色には作爲的傾向を残して居る。また文章もまた戲作的部分のあるのを免れなかつた。

さまざまに移れば變る浮世かな。幕府さかへし時勢には、武士のみ時に大江戸の、都もいつか東京と、名も新玉の年毎に、開け行く世のかけなれや。

の如きを見ても想像することが出来る。がこの題材に於て、表現に於て逍遙氏の所論の幾分を實現し得たのは勿論であつて、明治小説の初頭を飾る作品であることは疑を容れない。逍遙氏にはこの書生氣質の外に妹と背鏡・細君・壹圓紙幣履歴ばなしの如き作品がある。是等の中細君は明治二十二年の作で、一人の女中の眼に映つた紳士の家庭を寫し出だした所にその當時の生活を思はせるものがあり、壹圓紙幣履歴ばなしは明治二十三年に書かれたもので、紙幣がその多くの人の手に渡つて行く経路を紙幣の觀察として敘して居る所に奇警な觀察が見える。春廼舎漫筆に收められて居る。斯の如く逍遙氏の作は種々あるが、此の時代に最も注意すべき作品



浮雲

は二葉亭四迷の浮雲である。浮雲は三篇十九回から成り、明治二十年に第一篇、二十一年に第二篇が刊行され、第三篇は二十二年都の花に連載された。始めは春のや主人、二葉亭四迷の合著として出て居る。この作は叔父の家に寄寓して某省に勤務する内海文三といふ青年が世才に長じなかつたために免官になつたので、今迄好意を寄せて娘を娶せようとしてゐた叔父の妻お



長谷川二葉亭肖像

政は急に辛く當るやうになるが、文三はその一人娘のお勢を戀して居るので、その家を去り得ない。その中に叔母の家に同僚で世才に長けた本田昇が出入してお勢の心がその方に傾く。内海はお政・お勢・本田等に嘲笑せられても去り得ないで居るといふ構想であつて、たゞ四人の男女の性格ならびに心理的葛藤の描寫を主眼として居るのである。而も平凡なる日常生活を描いてその人物を活躍せしめて居る。なほその描寫に不十分な點もあり、文章にも戲文的な所もまゝあるけれども、此の時代の作品として一頭地を抽くものである。二葉亭は露西亞文學の造詣が深く翻譯の上にも功績があるが、その小説の上に寫實的態度をとつた所に最も注意すべきものがある。

硯友社

この二葉亭の時代に於て硯友社一派が小説壇に進出して來た。硯友社の生じたのは明治十八年の始めで、最初は我樂多文庫といふ回覽雜誌を綴つて居たが、明治二十一年印刷發賣する

に至つたのである。而してその中心となつたのは尾崎紅葉である。が始め紅葉と對立し紅葉よりも寧ろ先に名を出したのは山田美妙齋であり、美妙齋の去つて後紅葉が中心となつて多くの門下を率ゐる文壇に於ける一大勢力をなしたのである。この硯友社の設立は小説神髓の世に出で



たよりも三月程前であるから必ずしも小説神髓の影響といふ事は出来ないのであるが、硯友社の同人の作が、實際に於て文壇に認められるに至つてからの作はこの小説神髓の主張する寫實主義の影響のもとに起つて居るのである。然し硯友社の寫實は狭い主觀の上に立てられた寫實であるために、その主材は狭く囚はれて居り、皮相なる寫實であつたのである。その點に二葉亭と相違して寫實的態度に徹底し得ない憾がある。

第一に美妙齋に就いて考へると、彼が紅葉に先んじて名を成したのは短篇集夏木立によつて

山田美妙

である。是によつて清新なる抒情を基調とする彼の傾向は十分に見られるのである。六篇から成つて居るが、その中、世評の高かつた「武藏野」といふ作品は材を歴史にとり、南朝の新田義興の臣秩父民部とその婿とが、武藏野の秋の夕暮をとぼ／＼と辿るうちに敵に逢つて殺される。二人を待ちわびる民部の妻と嫁とはその報を聞いて傷心し、嫁は武装して出でて熊に殺されるといふ抒情味の高い作である。



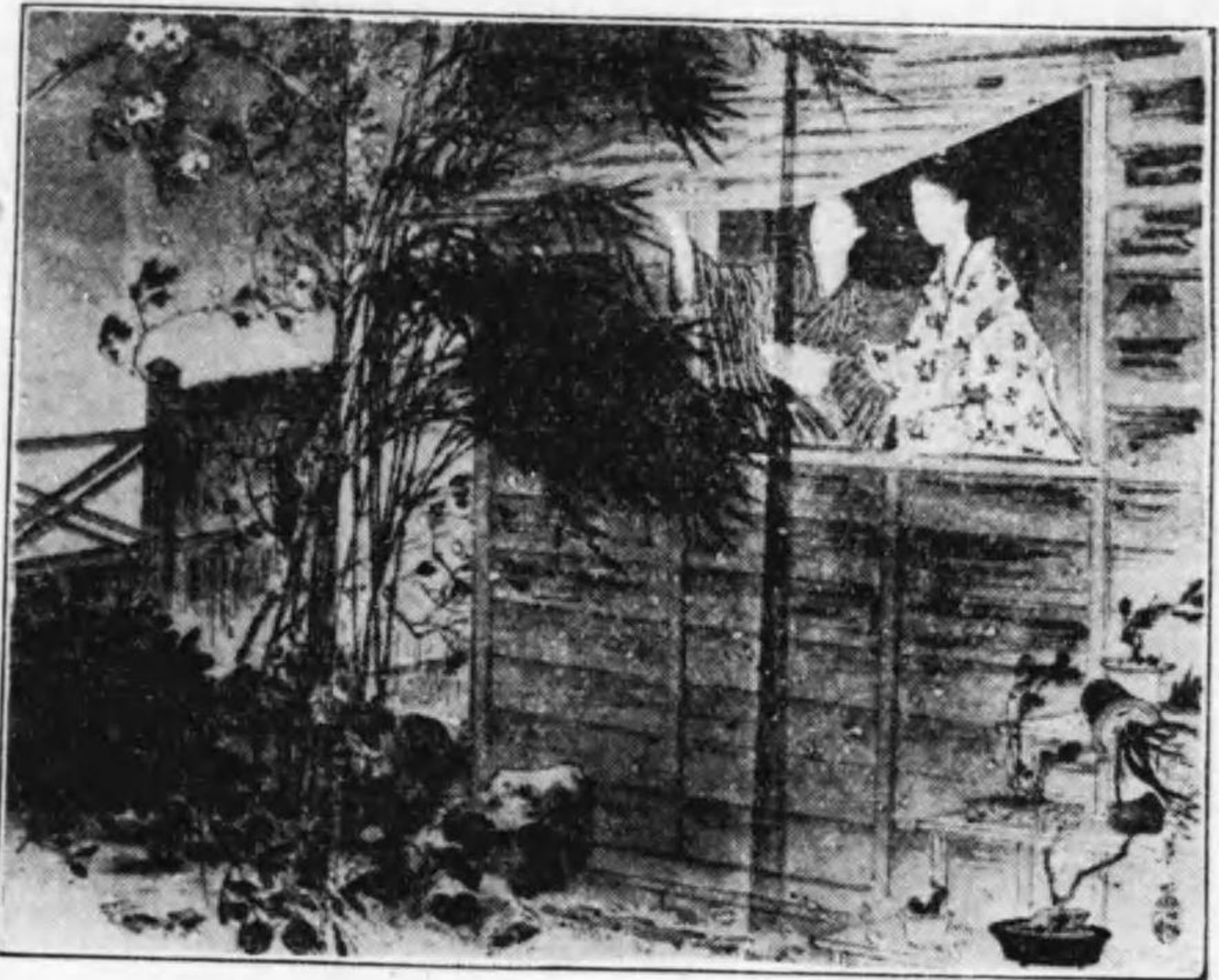
尾崎紅葉肖像

夏木立の後、美妙は硯友社を去り都の花といふ雑誌により、「花車」「ぬれ衣」「いちご姫」等を出だした。又國民の友に出でた「蝴蝶」の如きは傑作であつて、平家の末路に時代をとつて、戀と忠義との葛藤を描いたものであり、蝴蝶といふ女がその愛人の源家について平家に仇なすを知り、その情を捨て、愛人を殺すといふ材を扱つてある。美妙の盛時は僅か

でやがて紅葉に壓倒されてしまつた。紅葉の始めて名を成したのは美妙の「蝴蝶」と同時に明治二十二年新著百種の第一篇として二人比丘尼色懺悔を出してからである。色懺悔は「武藏野」や「蝴蝶」と同じ抒情的な作品である。山里に主客の二人の尼が語るのであるが、ともに同じ男性を戀して其の男性の死のために尼になつたことが明かになる。不自然な作爲の跡もあるが、夢幻的な此の種の作品としては

色懺悔

己むを得ないことである。而して豊麗を極めた文章はこの作品の名を高くした主要な點である。此の作の後紅葉は次第に寫實的傾向に進んで來た。明治二十三年から明治二十七年頃までは紅



紅葉山不言不語口繪

葉の第一期の全盛時代であるが、多く女性を描き且つ女性の類型的性格及びその性格から展開して來る運命の變化を描かうとした様に思はれる。二十四年に作られた二人女房はある官省に勤める士族の娘二人の性格ならびに運命の相違を敘してある。姉は容貌も美しく華麗であつたが、官吏に嫁して家庭の風波に苦しみ妹は醜くして地味を好んだが、職人に嫁し幸福な生活を送るといふ事を描いてある。同年に出た伽羅枕は遊女の腹に生れたお仙といふ女性が遊女になつて數奇の運命を送つた次第を敘してあり、西鶴の好色一代女からの構想上の影響が見られ、文章も西鶴の影響の最も著しきものである。二

三人妻

十五年の三人妻は葛城餘五郎といふ一富豪の三人の妾の性格の相違と、それより起る運命の相

伽羅枕

續案小説時代

違とを描いて居る。是等この期の主なる作は女性の類型的性格を描いたものであるが、次の二七・八年の頃は創作から續案に隠れた時代で、冷熱・隣之女・不言不語の如きそれである。かくて紅葉は想涸れたりといふ非難も起つたのであるが、二十九年に於て傑作多情多恨が作られ、また三十年より長篇金色夜叉に筆を執り、明治三十六年死してなほ完結しなかつたのである。

多情多恨

多情多恨は驚見といふ妻を失つた男を中心として、その唯一の友人葉山と其の妻お種との二人を配して構成されて居る。驚見の亡き妻に對する追慕が主であつて、そのあきらめ切れない弱々しき心の微妙なる動搖が精細に敘せられてある。外面的事件としては極めて平凡であるが、心理描寫の精細なるに至つては紅葉の作の中でこれに比較すべきものがないのである。その文體も口語文の洗練せられたものであつた。

金色夜叉

最後の金色夜叉は最も大作であつて、歿した後小栗風葉によつて終篇が書き續けられた程である。金のために戀に破れた間貫一が金を以て復讐しようとする所にこの作の基調がある。この作は、多情多恨が内面的には複雑であるが、外面上は殆ど事件といふ事件もない程であるに對して劇的な事件に富み、熱海の海岸を始めすべて外面的に波瀾があるが、それだけ又通俗味がある。紅葉の力作ではあり紅葉の特質をよく語つて居るが、必ずしも彼の秀作ではない。

硯友社の他の作家

硯友社は以上の如く紅葉が中心をなして居るが、外にも石橋思案や巖谷小波氏・江見水蔭氏がある。更に川上眉山・泉鏡花氏・小栗風葉等も硯友社から出て居る。眉山以下は紅葉の衰へてか



幸田露伴

ら活動して居るが、これを説く前に紅葉に對峙した幸田露伴氏を概観する。幸田露伴氏の處女作は明治二十三年の首に都の花に連載した露園々であるが、まだ露伴の特色を十分發揮して居

五重塔



紙表の(作伴露田幸)集末葉

風流微塵藏



紙表の(作伴露田幸)佛流風

ない。風流佛に藝術と戀愛との間に彷徨する珠運を描いて聲名高く、明治二十五年に出だした尾花集の中の五重塔は、彼の藝術的感興の最高頂に達した作品として彼の傑作とすべきものである。建築の天才あつて世才足らざるのつそり、十兵衛と、建築の技術とともに人としても優れて居る川越源太とを對照して、結局十兵衛の力で自然の暴威によつても少しも傷けられない五重塔が作られた経路を描いて藝術の永遠性に對する氏の信念が作の基調をなして居る。

新浦島・髯男

統一がない。明治二十八年には浦島傳説に新解釋を施した新浦島が出で、二十九年に髯男が出

天うつ波

て、信玄の歿後、暗愚なる勝頼によつて武田氏が衰亡して行く時に當つて主家のために氣を吐いたひげ男笠井大六を描いて男子の意氣を語つて居る。更に三十六年には長篇天うつ波を出したが未完成のまま、で小説界を退いてしまつた。彼の描く人物は紅葉と異なつて常に理想と意氣に燃えて居る。即ち辻澤瑠璃の主人公西村道也の如き遊蕩兒にも藝術に對する意氣と理想とが見えるのである。

饗庭篁村

紅葉・露伴時代にも更に種々の流派の作家があつた。饗庭篁村は傳統的作家の尤なるものであつて、八文字屋自笑の影響を受け氣質物の性質を有する作品を出だした。新著百種の中に出たほり出し物によつても知られる如く水の如きならかな筆致の中に、人生の事件を描いて居るが、それは説話本位の表面的なものが多い。ほり出し物は衰へた家運を回復しようとする主人公が、舊の家の庭から寶を掘出して再び富豪になる事を敘してある。短篇集むら竹は彼の作を集めてある。篁村は樂天洒落であつたが、皮肉諷刺を主潮とする傳統的作家に齋藤綠雨がある。

齋藤綠雨

綠雨の作では門三味線・油地獄・かくれんぼの如きが傑れて居る。門三味線は下町の少女の心理を扱つて居り、温順な富裕の商家の女と、近所の貧しき我儘な女との間に一人の男性をからませてある。また油地獄は田舎の富豪の青年が都へ勉強に出でたが、同國の者の懇親會の席で逢つた一人の藝妓の事が忘れられず溺れてゆく。が終に棄てられるに至る次第を描いて居る。何れも下町や狭斜の情調を漂はせて居る。

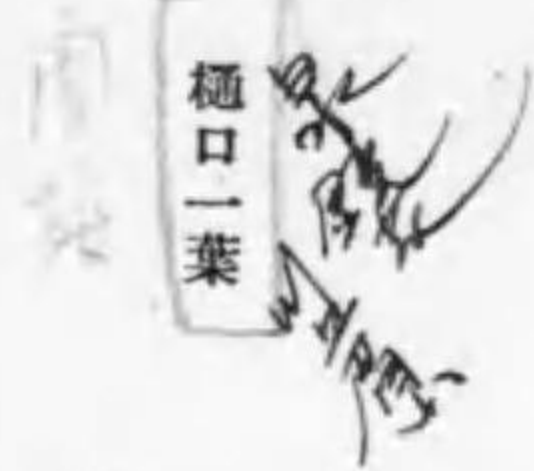
篁村や綠雨等の傳統的作家に對して主情的な傾向を有する作家に森鷗外及び矢崎嵯峨の舍がある。鷗外は評論家としてまた獨逸文學の紹介者として功勞があるが、古典的の匂の高い和文調から出發して清新な情調を湛へて居る。舞姫・うたかたの記・文づかひなどすべてドイツ留學時代に材を得た作品であつて、何れも若き外國婦人を主人公として日本の青年を配し、純粹感情の境地を描いて居る。鷗外の作品には古典的な匂があるが、感情を主として熱烈なるものに嵯峨の舍がある。流轉及び初戀などは嵯峨の舍の個性的な態度の見える作である。流轉には純真なる戀愛感情と宗教的感情との葛藤を扱つて居り、初戀には純真なる戀愛が扱はれて抒情的傾向が著しい。

かくの如くこの時期には種々の作家が出たが、殆ど紅葉・露伴によつて蓋はれて居つた観がある。

紅葉・露伴氏が衰へて後、小説壇には種々の機運が動いて來た。それ等の中下先づ注意すべきは樋口一葉である。

樋口一葉は明治五年に生れて二十九年十一月僅に二十五歳で歿して居る。明治二十五年三月に闇櫻を出だしてから僅か四年程の間に二十餘篇の作品を創作したのである。早く父に別れて世故の辛酸をなめ、そこから人生に對するさまざまの經驗を得、また人生に對する反抗を感じてそれが作品となつて現れたと思はれる。彼女の傑作はたけくらべであつて、廓近くに成長し

樋口一葉



て比較的早熟な少女の微妙な心理の描寫を行つて居る。遊女を姉に持つみどりといふお轉婆の少女が、次第に性に目覺めて戀愛を意識する心理を描き、他に正太郎といふ家も性格も學問もすぐれた少年、長吉といふ家も貧しく智慧もない亂暴な少年、龍華寺の信如といふ一見冷い消極的ではあるが犯し難い所のある少年を配して、全篇渾然たる場景を描いて居る。其の他にこりえはある場末の銘酒屋の女のお力といふ女性の淪落の生涯を描くとともに、このお力のために産をなくし妻をも去るに至つた源七の悲劇的な家庭を描き、最後にお力と源七との無理心中によつて兩者を結びつけて居るのである。また十三夜は身分の相違する家に嫁いだお國といふ女性が、夫の愛のないのに堪へかねて離縁して歸らうとして、父母に諭され力なく夫の家に歸る途中、乗つた人力車の車夫は己が戀人である事を知つて儘ならぬ世をかこちながら別れて行くといふ構想である。彼の作品の中には未完成のものもあるが、女性の心理を描き、女性のために泣いて同情して居る所に閨秀作家としての特色がある。

一葉はむしろ露伴氏に私淑して居つたと思はれるが、三十年代は紅葉の系統を引く作家によつて小説壇が形作られた。川上眉山や泉鏡花氏や小栗風葉の如きは其の尤なるものである。廣津柳浪もこの期に活躍した。

川上眉山と泉鏡花氏の作品は觀念小説と呼ばれて居る。一の觀念を表すために具象的な人間生活を捉へて描寫するのであつて、あるがまゝの人生を描寫するといふよりも、觀念の表現が

觀念小説

川上眉山

Mと肩山  
うらもて

主になつて居るのである。川上眉山のうらもてといふ作品をとつて見ると、人生の罪惡はいかにして構成せられるかを説いて、それは社會の罪であるといふ點から解釋しようとする。徳行家として名望のある者が社會の冷酷なるものによつて翻弄せられ財産も失ふに至つたので、社會の無情と冷酷とに泣き、そのために自らも盜賊となるに至るのであつて、盜賊となつた彼は惡むべきであるが、それは社會の罪であるとするのであり、その觀念を表すために此の如き事件を描いたのである。鏡花も二十八年の夜行巡査と外科室によつてこの傾向を明かにしたが、彼は次第に神祕幽玄な境地を描くやうになつた。しかし湯島詣の如き遊女の腹に生れた男性と一人の遊女との悲劇的な戀愛を扱つた現實的な作品もあるが、照葉狂言では少年が年上なる二人の女性に對する極めて純なる愛を表現して、現實の中にや、神祕的な感を抱かせるのである。更に高野聖に於て鏡花の幻怪趣味は遺憾なく表れて居る。高野の説教僧と旅にあつて、一夜をあかした時に聞けた説話としてある。説教僧が蛭の降り、蛇の横はる道を通つて、宿つた家には美しき女性と白痴の男とがあり、むさ、びや牛や馬や猿があつた。川の流に浴びる美しき女性に、人の變じたむさ、びや猿がまとひつく、深夜の戶外にはむさ、びや猿が泣き出す。そこに作者の女性觀や戀愛觀が表されたと見てもよい。此の如き神祕的な傾向は、黒百合に最も多いのであつて、人跡至らぬ神祕幽玄の世界に咲く黒百合を求めようとする事を描いた黒百合の如きもそれである。

廣津柳浪

この觀念小説といふ類型の中に入れるべきものではあるが、特に深刻小説と言はれるものに廣津柳浪の作品がある。深刻小説はある觀念を具象化した作品であるが、現實の社會的缺陷から、又其の他の缺陷から極めて悲惨なる運命を産み出だす、深刻なる悲劇的事件を扱つたといふ點から、特に深刻小説若しくは悲惨小説と名づけられたものである。例へば氏の最初に名を成した明治二十八年の黒蜥蜴・變目傳の如きを見ると、黒蜥蜴は片目で痘面で醜くはあるが眞淑なる大工の妻が、その舅の酒亂によつて眞操を奪はれんとした爲に、黒蜥蜴で舅を殺して自殺するといふ悲惨なる悲劇を構成するものであり、變目傳は傳吉といふ小さいめつちの男が人に嘲弄せられつゝ、なほある女性に對し戀慕の心を起すが、その不具の爲にそれも得られない結果、殺人罪を犯すといふ悲劇を構成するものであつて、境遇や肉體の缺陷が必然的に産み出す悲惨なる事件が描かれて居る。この境遇や不可抗な運命が人間を悲劇に導いてゆく例として畜生腹・河内屋を擧げる事が出来る。畜生腹は夫の不在中に雙兒を産んだ妻が畜生腹と言はれるのを恐れ、女中の惡婆に誘はれて一人を殺すやうになる所から起つた悲劇であり、河内屋は許嫁の男女が結婚する事も出來ず、女は許嫁の男の兄に嫁し、そこから悲劇を産み出すのであつて、何れも殺人や自殺を以て終つて居る。更に今戸心中は遊女が愛する男性と離れなければならなくなつた所から自暴自棄となり、嫌つてゐた男と心中するに至る経路を描いて居る。かういふやうに、すべて環境等から悲惨なる事件を産み出だすといふのが柳浪の作の主旨であ

つて、人生の暗黒面を鋭く解剖してあると言へるのである。この時代には小栗風葉も紅葉の衣鉢を受けて華麗なる筆致を以て活躍し、戀慕流に於て尺八の天才である一青年と音楽の才ある女性との悲劇的な戀愛から男性も次第に零落し、女性も病臥の身となり、投身し、辱められ、終に悪人の妻となり、自殺に陥る運命を描いて居る。

其の他の作家  
 その他徳富蘆花等の家庭小説や、村上浪六氏の小説等種々現れて来たが、やがて小杉天外のはつ姿に於て寫實主義が唱へられて、三十年代の後半に於て自然主義的傾向が中心となるに至つた。小栗風葉の如きは自然主義時代にも生命を持続したが、多くは新しい作家によつて小説壇が飾られるに至つたのである。

### 三、自然主義時代の小説

自然主義の作品

次第に起つて来た自然主義の思潮が最も明かに文學に現れたのは小説であつた。自然主義の作家は國木田獨歩・島崎藤村氏・田山花袋・徳田秋聲氏・正宗白鳥氏を始め極めて多かつたが、茲には二三の作家の作を少しく述べて自然主義的傾向を大體に見るに止める。

國木田獨歩  
 自然主義的傾向を最初に示したものに小杉天外のはつ姿がある。はつ姿のある部分には寫實的傾向が見えるが、なほ深く現實を諦視するまでには至つてゐない。また國木田獨歩には浪漫的傾向も多く存するが、人生的である點に、現實の上に立つて居る點に自然主義的傾向が見ら

れる。即ち牛肉と馬鈴薯に於て夢から醒めて眞の自己に目醒めるべきことを説き、現實的と理想的との思想を開展させ、最後に現實に立脚すべきことを説いて居るのである。運命論者に於てはこの現實が如何に暗いものであるかを暗示して居る。ある一人の男性が數奇なる境遇に在つて、知らずして兄弟の間に不倫の關係を生じ、それを運命であると寂しく諦める所に悲痛なる現實が見出だされる。獨歩の作は簡潔な筆致で力強く主題を展開させる所に特徴がある。従つて彼の作には短篇が多い。之に反して島崎藤村氏や田山花袋等は大きな構想の中に人生の相を表した。殊に藤村氏は前期に於ける多感な抒情詩人から、田山花袋は浪漫的傾向から展開して自然派作家の中心となつた所に個性の展開を思はしめる。

島崎藤村  
 藤村氏の破戒は丑松といふ新平民の青年教師が、階級的壓迫の苦楚をなめつゝ、新平民たる事を告白してはならないといふ親の戒を破つて、生徒の前に新平民たる事を告白し奉職して居る學校を去る點を骨子として、信州の郷土的色彩を描きながら、解放的精神を描いて居る。また明治四十一年に刊行された春は、作者自身及び北村透谷等の文學界の青年が現實と理想との矛盾に悩みながら、眞率に歩いて来た道が客觀的に描かれて居る。春に至つて人間生活のある斷面を切離した感があつて現實的である事を思はしめる。しかし春は若い青年を對象として現實を描いて居るために、なほ主情的な理想的精神に燃えて居るが、家に至ると青年が家を持ちそこに複雑な人生の相を體驗して居る所に、更により現實主義的な内容が扱はれて居る。三吉

といふ作者自身であるらしい青年作家が新しい家庭を作りゆく経路を主として、三吉の生れた家である小泉家ならびに姉の嫁いだ橋本家といふ舊家の衰へてゆく経路とともに、三吉の新しく作つた家にもさまざまの難みと苦しみとを體驗しつゝ、ゆく経路が描かれて居る。そこに家よりも個性を重んずる信念が見られるのである。

一體に藤村氏の作品はかくの如く傳統・權威・理想が現實との争闘によつて破壊されてゆく経路を現實的の筆を以て表して居るが、藤村氏の有する抒情味は是等の作品に於ても全く失はれてはゐない。

## 田山花袋

田山花袋は藤村氏とや、異つて平面描寫を主張し、あくまで客觀的に事象を寫さうとする所に特徴を有するが、氏の作にも抒情的傾向はなほある。蒲團はある中年の男性が弟子である若き女性に對する性慾を大膽に描いた作品であり、文壇の上に大きな波紋を投げた。また藤村氏の春と同年に出でた生は重くるしき人生を描いて居る。弟等を世に出だす爲に霸氣に充ちた精根を涸らしてしまつた兄の鏝といふ人物がある。鏝の後妻のお桂、鏝の妹で他に嫁いで居るお米といふ二人の女性が、家庭に於て常に争闘する。而して死んだ老母の形見分けに、二人は掴み合ひをして争ふのである。皮肉な勝氣な而して温情もある老母が病のために次第に衰へて死んでゆく経路は、たゞに一人の女性の死ではなくして人間そのものの必然的な運命を暗示して居る。花袋の作はこの他妻や冥や田舎教師を始め數多いが、何れにも重くるしい人生が見ら

れる。花袋はこの壓倒する如き人生の姿を時によつて解決せしめて居る。如何なる悲みも艱みも時が洗ひ去つてしまふと考へるのである。この點に花袋の消極的なあきらめ、若しくは運命論的な思想が見られる。

## 正宗白鳥

更に自然主義作家の中に於ても正宗白鳥氏は特徴を有する作家である。白鳥氏の作品には虚無的な思想がたゞよつて居る事を感じる。白鳥氏の描く人生は疲れ切つた、聲を擧げて悲む事も出来ないやうな敗殘の人生である。氏の作泥人形は家のためにのみ生きる妻が泥人形の如きである。と觀じた所に、光明も理想もなき人間の姿を表して居る。又何處への如きも人生の享樂に疲れ切つた物憂い人間生活を描いて居るのである。また徳田秋聲氏は藤村・花袋二氏のやうな花やかさもなく、獨歩のやうな直截もないが、質實に人生を描寫してそこに倦怠しきつた人生を見せてゐる。微や爛の如きにしても平凡な人間生活を描いてそこにしみん、人生を思はせるものがある。自然主義作家は是等の外にも多い。小栗風葉にも戀ざめを始め、自然主義的作品が多くあり、二葉亭四迷も其面影・平凡の二作を残して居る。

## 徳田秋聲

しかしこの時代に於ても傾向を異にした作家が無いではない。夏目漱石を中心にした高踏派・餘裕派の作品と、谷崎潤一郎氏を中心とした唯美主義的作品の如きはその最も著しいものである。夏目漱石が俳人より出でて作家となつた點は西鶴に類似して居るのであるが、この俳人より出でたことが漱石の作品の色調の重要な點となつて居るのである。自然派の作品は客觀描

## 高踏派

寫をとつて居るけれども、その全體に於ては人間の心の苦闘が溢れて居る。従つて作品の基調は暗いじめ／＼したものであるが、餘裕派の作品は傍觀的な態度を以て觀察し描寫されるために、人生そのものに當面するやうな眞剣さが見られない。漱石の最初の優れた作である我輩は猫であるを見る時、氏の物を見る場合に於ける餘裕のある態度は明かに見られる。虞美人草にしても坊ちゃん・三四郎からそれから行人・明暗と彼の作品を辿つて見ても、常に自然派のやう



夏目漱石肖像

な暗いじめ／＼した氣分は見えない。もとよりこの間に相當の變遷は認められるのであつて、初期の草枕にしても虞美人草にしても華麗な表現を用ゐて居り、殊に倫敦塔の如きには浪漫的な香が高い。而して次第に華麗なる表現から内面的に進み、心理的な觀察を下して居る。然しながら後年の心理描寫にしても理智的な態度で心理の變遷を傍觀的に眺めて居るのであり、そこにユーモアも見ることが出来る。それから扱はれた題材にしても心に扱はれた題材にしても、人生の悲劇的材料を捉へたものでありながら、讀者はそれを讀んで人生の苦悶の中に引入られる事もなく、かゝる悲劇的葛藤の心理的解釋を聞くやうな心持を感じるのである。その作品は浪漫的から寫實的心理的傾向に進んで行つたのであるが、その根柢に於ては常に我輩は猫であるの境地は離れてゐないのである。即ち草枕に於て作者が繪師の口をかり

て述べた非人情の世界は是れである。それは一面から見れば、小さい我を超越して大きい我の上立つて居るとも言へる。則天去私の境地は新理想主義的傾向を産み出だすものであつたとも言はれるであらう。

この外餘裕派の作品としては高濱虛子氏の俳諧師・續俳諧師の如きがあるが、その寫實の態度に於て漱石に近づいては居るが、漱石の冷靜な心理解剖には到つて居ない。作者自身である三藏の觀照の態度は餘裕派的であるが、十風夫婦の破壊されて行く生活の描寫には自然派的傾向が見えると思ふ。

## 唯美派

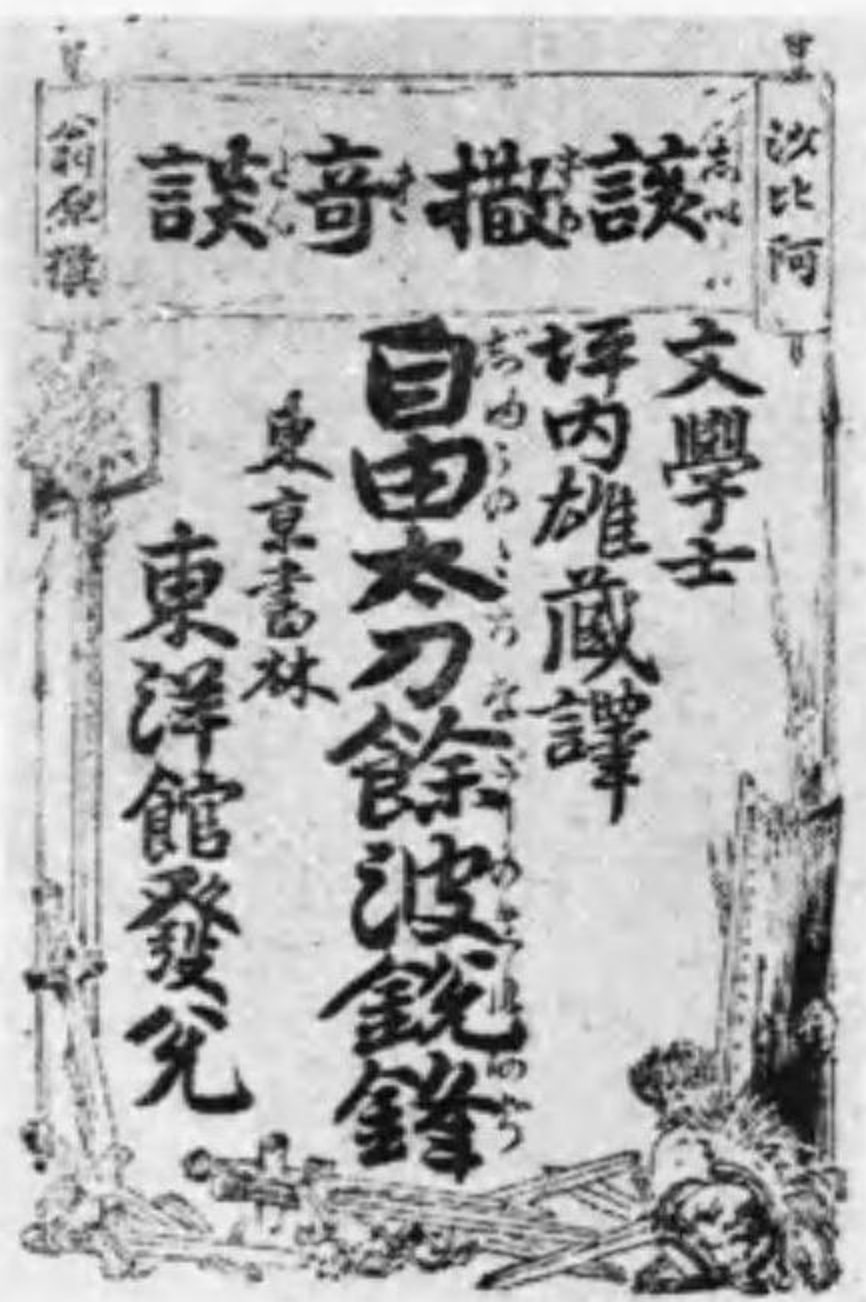
この自然派と餘裕派とはその人生の觀照の態度に於て非常な相違はあるが、何れも人生のための藝術であつたに比して、谷崎潤一郎氏の唯美主義的傾向は藝術のための藝術を創作した所に特異の境地がある。谷崎氏の描く所はありのまゝの人生でもなく、人生の中から美をえぐり出して居るのである。その美は道德的な美でもなく、又生々した現實の醜さを情趣化する事によつて得られる美でもなく、人生の中から感覺的な美を見出ださうとして居る。それは惡の中に見られる美でさへもある。

### 第四章 戯曲

#### 一、初期の戯曲

古河黙阿彌

明治十六年には坪内逍遙氏の沙翁のジュリアスシーザーを淨瑠璃風に翻譯した該撒奇談が出た。即ち二十年代に於て最も注意すべきは史劇の勃興である。史劇といふのは従来の時代物から來て居るのであるが、時代物はたゞ時代を過去に取つただけで、その精神なり表現なりに於ては世話物と同一であるか若しくは夢幻的な表現をなして居るに過ぎないと思ふ。黙阿彌の作



紙表の該撒奇談 (譯逍遙内坪)

多少示さうとしたのである。しかし中心となる所は勸善懲惡主義であり、たゞそれに幾多の新しい配景を與へたに過ぎなかつた。たとへば明治十三年の作である木間星箱根鹿笛といふ作を見ると、四幕物であつて、岩淵九郎兵衛が遊女に迷つて、妻のおさよを殺したために妻の亡靈に苦しめられるといふ勸善懲惡主義が中心となつて居るが、九郎兵衛がもと士であり、明治の初めに商人となつて失敗したといふが如き點に明治初期の空氣を示して居り、また郵便や男女同權といふやうな言葉を珍しげに用ゐて居るのである。又明治

十四年の島衝月白浪は、四幕の白浪物であつて、辨天お照・望月輝・松島千太・明石の島藏は何れも盜賊であるが、最後には善に歸つて居る。而して明治初年の空氣はこれにも見られ、「送

籍なければ妻にあらず。表面に公裁を仰がねば證據は立たざるぞ」といふやうな言葉も見られるのである。要するに假名垣魯文と同じく、明治の空氣の上に立つて而も傳統に生きた作家と見られるであらう。かくて前期の劇はこの傳統的藝術なる歌舞伎劇にのみよつて居たのである。

#### 二、活歴物と史劇

第一期の劇文學は主として黙阿彌によつて代表された歌舞伎劇であつたが、二十年代に於ては、この歌舞伎劇が新しい方面に展開して行くと同時に別の一運動が起つ



繪挿の鋒銳波餘刀太由白

た。即ち二十年代に於て最も注意すべきは史劇の勃興である。史劇といふのは従来の時代物から來て居るのであるが、時代物はたゞ時代を過去に取つただけで、その精神なり表現なりに於ては世話物と同一であるか若しくは夢幻的な表現をなして居るに過ぎないと思ふ。黙阿彌の作

## 活歴物

品も亦世話物であるか若しくは夢幻的なものに過ぎなかつたので、史劇といふものとは餘程異なるものであつたが、二十年代に於て夢幻的な作品から離れて史劇としての第一義的なものに進んで来た。思ふに史劇はその根柢に於て夢幻的空想的な點から、寫實といふ精神に基礎をもつて居るものと思ふ。もとより歴史的事實その儘ではないが、少くともその根柢に於て歴史の上に現れた人間生活の解釋といふ點に基礎をもつて居る。かういふ史劇の現れる前に先づ活歴物が現れた。依田學海の作品の如きはこれである。學海の活歴物は夢幻的な立場と違つて寫實を基礎として居つたのであり、**吉野拾遺名歌譽や文覺上人勸進帳**などを始め作品は多いのであるが、荒唐無稽の奇を求むることを避ける餘り、只管史實によつて過去を再現するのみにつとめた結果劇的の力に乏しいのである。そこに活歴物の短所がある。この活歴物の系統を引いて居るが、この時代に實際の劇といふ點から見て勢力のあつたのは福地櫻痴である。

## 福地櫻痴

櫻痴は初め新聞記者として政治の方面に携はつたのであつたが、終に劇界の方面に轉じた。劇界に於ては默阿彌の後を繼ぎ市川團十郎と結んで雄飛した。所謂九代目團十郎は茫漠な不器用の中に大きい藝を見せた人であり、一方には劇なるものの品位を高めた點に於ても演劇史の上に忘るべからざる人である。五代目菊五郎・初代左團次との三人が明治三十六年頃までの歌舞伎劇の上に力があつた。櫻痴は團十郎のために多くの作を成したのであつて其の作は多いが二三の作に就いて述べると、**春日局**は明治二十一年に稿して實際に演じたのは明治二十四年の頃

である。五幕であつて、山科に閑居して居る稻葉佐渡守正成の妻のお福が家康の拔擢により、後に三代將軍家光となるべき竹千代の守役となり春日局といふ。而して次男の國千代を御臺所一派が世嗣にしようとするに對し、男まさりの春日局が竹千代をあくまで守つて世嗣とするに至る苦心を主題として扱つて居る。不自然な構想はなく寫實的であるが、外面的事件の記述に偏して内面的解剖に乏しい。かういふ點は櫻痴の作には共通した所であるが、比較的この弊の尠くて、すぐれた作は**俠客春雨傘**である。この作は始め小説として作り、後明治三十年頃に脚色して舞臺に上せた。大口屋曉雨といふ者が始め淺草藏前の札差であつたが、後家督を弟に譲つて俠客となり、廓に出入する中に丁山といふ遊女になじむ。丁山のかむろのお鶴といふ女の可憐な境遇を聞いて金を遣つたのを後に丁山になじられたといふやうな行懸りから、丁山と離れ葛城といふ遊女の力によつてお鶴は薄雲といふ遊女になる。お鶴の父は邊見一角に殺されたが、一角は曉雨が札差の時恥を受けた男であつたので、薄雲を助けて敵討をさせるといふ曉雨の義俠的精神を中心にして描いてあるが、その精神が全篇を貫いて劇的な強い力が見られる。が全體から言つて櫻痴の作にはなほ内面的解釋が乏しいのであるが、この寫實的態度を取りながら内面的解釋を企て、史劇を完成し、**性格劇**といふ方面を開拓したのが坪内逍遙氏である。

逍遙氏が小説に於て革新を企て、から更に劇方面に移つて新しい方面を開拓した功は偉大である。逍遙氏は所謂劇は個々人物の性格を因となし、境遇を縁となし、此の因縁によつて起る

坪内逍遙氏の  
史劇



# 桐一葉

二五二

著大なる業果を描いて人事の真相を現す所に精髓があるとして、史劇にしてもその人物を過去の特殊の境遇の下に立たしめて、人事の真相を過去事實の中に表現するのが目的であるとする立場から先づ試みたのが桐一葉であつた。即ち豊臣氏の滅亡に瀕して行く間に起る歴史的事實の中に人生の普遍なる相を見出ださうとしたのであつて、片桐且元を中心人物としてその性格を解剖するとともに、一方に淀君といふ人物の複雑なる性格を表現して居るのである。而して桐一葉に於ては且元が大阪城を退去するまでの事件であつて、事件も完結せず、且元の性格も盡さないのであるが、その點を完結させたのが沓手鳥孤城落月である。この作に於ては且元の退去後、木村・後藤・薄田等も戦死して大阪城の落城も且夕に迫つた時から筆を起して、淀君の狂暴性に陥つて行く所を敘してある。而して且元が落城に臨んで秀頼母子の助命を請うて、一旦家康の許しを得たが、それも遂げずして秀頼母子は自盡し、且元は燃え上がる火の手を眺めながら倒れるといふ所に終つて居る。逍遙氏は更に鎌倉時代に材を取つて牧の方を著して居る。此の作は時政の妻の牧の方を中心としてその陰謀事件を扱つて居る。この作に於て牧の方は作者自身マクベスと同じやうな性格の女性を描かうとしたのであると言つて居るが、また桐一葉の淀君とも類似する。即ちひがみややく浅慮で我子の愛に溺れて公平な道を失ふ女性が描かれて居るが、淀君のやうに性格が生々として居ない。この作は三部作の一として作られた事は作者自ら言つてゐる所であつて、後年名残の星月夜に實朝を描き、善時の最後に義時を扱つて居

## 新派劇

り、是等の三部によつて大きな戯曲が完成せられるのである。

斯くこの時代は歌舞伎から出た史劇が作られたと共に、一方に新派劇の現れて來た事は劇の發展の上から言へば注意すべき事である。歌舞伎劇から出た史劇が過去の題材の中に新しい時代精神を加味せんとしたのに反して、新派劇は新しい時代の皮相的な寫實から始まつて居る。第一期に於て政治小説が明治初期の社會の皮相なる寫實であつたが、この新派劇の初めは雪中梅や花間鶯程度の皮相なる寫實であつたのである。殊に日清戦争などの影響を受けて壯士劇といふものが出來、戦争を題材としたものが行はれた。是等は劇としては殆ど價値のないものであつたが、三十年時代に於て川上晋二郎や伊井荅峰・高田實などが出て金色夜叉や不如歸などを演ずるやうになつてから、劇としてや、價値あるものとなり、明治三十五・六年の頃に團十郎・菊五郎・左團次等の名優を失つた歌舞伎劇の衰微に乗じて勃興した。

## 森鷗外の翻譯劇

更に森鷗外等によつて浪漫的な劇が翻譯せられて居る。カルデロンの作を譯した調高矣洋絃一曲は明治二十二年に成り、またレッシングの作であるエミリヤ・ガロツチイを譯した折薔薇といふ劇が現れて居る。かくの如き翻譯劇も逍遙氏の史劇などとともに容易に實演せられる迄には至らなかつたが、次第に劇の上に新しい機運を導き出すに至つた。鷗外が明治三十五年に玉匣兩浦島を作り、明治三十七年に日蓮聖人辻説法を作つたことは注意すべき一つである。何れも短い形式で、敘事詩劇ともいふべきものである。是等から更に逍遙氏の樂劇の如きものが作

られるに至つた。

### 三、樂劇と社會劇

樂劇

後期に於ては歌舞伎劇が傳統的な勢力を持続して居り、また坪内逍遙氏の性格劇や樂劇などが作られた。殊に氏は明治三十七年新樂劇論を著して樂劇を鼓吹し、それを實際の作品の上に現した新曲浦島を始め新曲赫夜姫・鉢かつぎ姫・新曲初夢・新曲金毛狐等を著した。是等の新曲浦島は浦島傳説を扱つたのであつて、浦島が龍宮にあこがれる事を以て迷とし、現世に蓬萊をうつすべき事を説いた所に現實的な見方が見られる。而して此の期に於て自然主義の戯曲に與へた影響としては、イブセン劇などの翻譯劇の行はれた事と、その影響を受けた中村吉藏氏等の社會劇の起つた事を擧げることが出来る。イブセンの人形の家にはたゞ傳襲的に家庭の妻となつて居る女性が、自覺の結果家を出る事を主題として扱つてある。海の夫人にしても、社會の柱にしても個性の自覺、權威の失墜といふ點を扱つてある。かういふやうな翻譯が行はれるとともに、その影響を受けて社會劇が作られて居る。中村吉藏氏の作品の如きはそれであつて、

翻譯劇

社會劇

例へば氏の作である剃刀を見ると、村の小學校を優等で出た一人の男は家の貧しいために學問をすることも出来ず理髮屋になつて居る。餘り優等でなかつた少年は家が富んで居たために學問をして名士となり、郷里に錦を飾る。その理髮屋で頭髪を刈り居る中に理髮師は彼を剃刀で

殺してしまふといふ構想で、社會の缺陷から起る悲劇が深刻に描かれて居るのである。が是等の社會劇にも西洋劇の内容をそのまま、取入れた感があつて、日本の社會生活の上に悉く適合しない點もあつたと思はれる。而して此の如き社會劇から次第に日本の實社會そのものの上に立つた思想劇が行はれて來て、それが歌舞伎劇に對して一つの流れを展開せしめて居ると思ふ。

斯くして戯曲文學に自然主義的影響があるとともに文學一般に於て自然主義的傾向が中心となつたが、自然主義の作品は人生の暗い方面のみ描いて、そこに人生觀照の點に全からざるものがあり、やがて明治の末年には自然主義は次第に衰へて、大正時代に入り新理想主義・新現實主義等が擡頭するに至つた。

50  
25

## 日本文學史概説 終

# 日本文學年表

一、年號は主なるものを擧ぐ。  
 二、著作は本文に出でたるものを主とす。  
 三、排列は成立年代を顯慮したれど大體に止む。

時代	(期前代時和大)古上					
	和銅	慶雲	大寶	朱鳥	白鳳	白雉
作家		柿本人麻呂			(神武天皇) (日本武尊)	
詩歌				(記紀歌謠)		
物語小説					(神話) (傳説)	
戲曲						
日記・隨筆 其他					(祝詞) (壽詞)	
學書						

日本文學年表

和銅三年  
 西紀一三七〇  
 西紀七〇〇

上(大)和時代後(期)															
延曆	天應	寶龜	景雲	神護	神護	天平	寶字	天平	勝寶	天平	天平	神龜	養老	靈龜	和銅

山部赤人

太安麻呂(養老七)

大伴旅人(天平三?)

山上憶良(天平五?)

懷風藻

大伴家持(延曆四)

萬葉集

古事記

風土記

日本書紀

日本靈異記

(宣命)

歌經標式

延曆一三年  
西曆一四五四  
西曆一四九四

中(平)安時代

延曆	大同	弘仁	天長	承和	貞觀	元慶	仁和	寬平	昌泰	延喜	承平	天慶	天曆	天德
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

僧 空海(承和二)

在原業平(元慶四)

小野小町

菅原道真(延喜三)

凡河內躬恒

紀貫之(天慶九)

(神樂)

(催馬樂)

凌雲集

文華秀麗集

經國集

竹取物語

伊勢物語

大和物語

土佐日記

文鏡秘府論

古今集序

後撰集

宇津保物語

*Handwritten scribbles and text at the top of the right page, including "There is a..."*

(期中代時安平) 古 中 期 前

長久	長曆	長元	萬壽	治安	寬仁	寬弘	長保	長德	正曆	寬和	天元	天延	天安
			藤原公任(長久二)	赤染衛門	和泉式部	清少納言	紫式部	曾禰好忠					
	本朝文粹				和漢朗詠集		拾遺集						
					源氏物語								落窪物語
					枕草子	紫式部日記	和泉式部日記						蜻蛉日記
								新撰髓腦					

日本文學年表

四

安 平) 古 中

保延	大治	天治	元永	永久	天永	長治	康和	寬治	永保	承保	延久	康平	天喜	永承	寬德
藤原基俊(康治元)			源 俊賴(大治四)					源 經信(承徳元)						菅原孝標女	
			金葉集					後拾遺集							
					大鏡			榮華物語	堤中納言物語	とりかへばや物語	夜半の寐覺	濱松中納言物語	狹衣物語		
								讚岐典侍日記							
			袖中抄					難後拾遺抄							
					古今集註(教長)										
			無名抄(俊賴)												

日本文學年表

五



町		時		代		前		(期)	
定貞	寛喜	貞永	天福	嘉禎	仁治	寛元	寶治	建長	文永
後鳥羽天皇(延應元)			藤原定家(仁治二)						阿佛尼(弘安六)
									玉葉集
			水鏡						古今著聞集
									石清水物語 苔の衣 十訓抄
									(田樂)
									東關紀行
									十六夜日記
									釋日本紀
									無名草子 萬葉集抄(仙覺)

建武元年  
西紀一九六四  
西紀一三三四

近古		鎌倉		室町		町時		代	
建武	正平	文中	天授	元中	應永	文安	應仁	文明	明應
	吉田兼好(正平五)	北畠親房(正平九)				阿(元中元)		二條良基(元中五)	宗祇(文龜二)
	新葉集	草庵集			筑波集	新筑波集			閑吟集(小親)
	吉野拾遺	增鏡	太平記			義經記	曾我物語		(お伽草子)
	(舞の本)					(狂言)			
	徒然草								
	古今童蒙抄	河海抄			花鳥餘情	萬葉集抄(宗祇)	筑波問答	古今榮雅抄	吾妻問答
							世阿彌十六部集		禪竹集

近世(江戸)							後(期)			
慶長	元和	寬永	正保	慶安	承應	明曆	慶長	天正	永祿	天文
							荒木田守武 <small>(天文一八)</small>	大筑波集		
松永貞德 <small>(承應一)</small>							山崎宗鑑 <small>(天文三三)</small>	守武千句		
作室										
詩歌										
因果物語 二人比丘尼										
金平千人切							淨瑠璃十二段 草子			
金平法問評										
物語										
戲曲										
奥の細道										
源氏物語湖月抄										
萬葉代匠記										
和字正濫鈔										
紫家七論										
國歌八論										

近世(江戸)							前(期)											
元文	寬保	延享	寬延	寶曆	明和	安永	享保	正徳	寶永	元祿	貞享	天和	延寶					
竹田出雲 <small>(寶曆六)</small>							近松門左衛門 <small>(享保九)</small>				井原西鶴 <small>(元祿六)</small>		松尾芭蕉 <small>(元祿七)</small>					
賀茂翁家集							荷田春滿 <small>(元文元)</small>				戸田茂睡 <small>(寶永三)</small>		釋契沖 <small>(元祿一四)</small>		春葉集			
天降言											芭蕉七部集		漫吟集		晚花集			
燕翁句集											お伽婢子		好色一代男		好色一代女			
後撰夷曲集							奇談英草紙				傾城色三		日本未代藏		會根崎心中			
狂言鶯蛙集							異素六帖				味線		國姓爺合戰		天の網島		奧の細道	
柳樽							遊子方言				傾城短氣		女殺油地獄		女中宵庚申		幻住庵記	
六帖詠草							辰巳の園				世間息子氣質		八百屋お七		心中二つ腹帯		駿臺雜話	
小澤蘆庵 <small>(享和元)</small>							金々先生榮華											
菅原傳授手習鑑							假名手本忠臣											
通言總籙							關取千兩幟											
忠臣水滸傳							北條時頼記											
神靈矢口渡							一谷嫩軍記											
五大力戀絨							玉勝間											
金門五山桐							花月草子											
新學							萬葉考											
冠辭考																		



享和	文化	文政	天保	弘化	嘉永	安政	萬延	文久	元治	慶應
加藤千蔭(文化五) 上田秋成(文化七) 村田春海(文化八)	山東京傳(文化一三) 式亭三馬(文政五)	蜀山人(文政六)	小林一茶(文政一〇)	鶴屋南北(文政二二)	十返舎一九(天保二)	柳亭種彦(天保三)	爲永春水(天保三)	香川景樹(天保四)	平田篤胤(天保四)	瀧澤馬琴(嘉永元)
うけらが花 藤篋冊子 琴後集	櫻姫全傳曙草 昔語稻妻表紙 七番日記 橋説弓張月 里見八犬傳 近世説美少年	桂園一枝 浦のしほかひ 亮々遺稿 草徑集 志濃夫廼舍歌集	浮世風呂 浮世床 花曆八笑人 滑稽和合人 修紫田舎源氏 春色梅曆 春色辰巳園	東海道四谷怪談 お染久松色讀 朝田川花御所	伊賀越乗掛合 加賀見山廓寫本	おらが春 泊全集	萬葉集略解 源氏物語玉の小櫛 古事記傳			

明治元年	西紀一六六	明治元 年より 明治十 八年迄	明治十 八年迄
新島襄(明治三)	加藤弘之(大正五)	中村正直(明治二四)	古河默阿彌(明治二六)
假名垣魯文(明治二七)	矢野龍溪	東海散士(大正一一)	末廣鐵腸(明治二九)
福澤諭吉(明治三四)	中江篤介(明治三四)	福地櫻痴(明治三九)	坪内逍遙
二葉亭四迷(明治四二)	山田美妙(明治四三)	新體梅花詩集	孝女白菊の歌
浮雲	夏木立	二人比丘尼色懺悔	當世書生氣質
春日局	春雨傘	桐一葉	自由太刀餘波 鏡鋒
明六雜誌	歌舞伎新報	六合雜誌	西洋事情 世界國盡 學問のすゝめ 日本書紀通釋 維氏美學
我樂多文庫	國民の友	都の花	女學雜誌
○小説神髓			

世明治時代中期

尾崎紅葉(明治三六)	於母影	二人女房	春手鳥孤城落月	新小説	月草
幸田露伴	新體詩歌集	伽羅枕	牧の方	柵草紙	
落合直文(明治三六)		三人妻	玉簫兩浦島	早稻田文學	文學その折々
森 鷗外(大正一一)	若菜集	多情多恨	日蓮聖人辻説法	文學界	
北村透谷(明治二七)		五重塔		帝國文學	
正岡子規(明治三五)	天地有情	ひげ男		文藝俱樂部	
樋口一葉(明治二九)	ゆく春	むら竹		中央公論 (反省雜誌改題)	
饗庭篁村(大正一一)	草わかば	舞 姫		明星	
齋藤綠雨(明治三七)	東西南北	たけくらべ			
高山樗牛(明治三五)	亂れ髪	金色夜叉			
川上眉山(明治四一)	舞 姫	高野聖			
網島梁川(明治四〇)	春泥集	河内屋			
泉 鏡花		今戸心中			
土井晩翠					
與謝野鐵幹					
與謝野晶子					

最 近 世 明 治 時 代

明治三十七八年より明治四十五年まで	島村抱月(大正七)	浦 團		早稻田文學 (再刊)	近代文藝の研究
	岩野泡鳴(大正九)	破 戒			
	國木田獨步(明治四一)	春			
	後藤宙外	家			
	島崎藤村	生	新曲浦島		國文學全史 (平安朝篇)
	田山花袋(昭和五)		新曲赫夜姫		
	正宗白鳥		鉢かつぎ姫		
	薄田泣菫				
	蒲原有明	微 光			
	上田 敏(大正五)	微			
	夏目漱石(大正五)	たゞれ			
	谷崎潤一郎	運命論者		三田文學	文學論
	石川啄木(明治四四)	牛肉と馬鈴薯	刺 刀		
	高濱虚子	刺 青			
	河東碧梧桐	吾輩は猫である		白 樺	

西 帝 紀 一 九 一 二	明 治 四 五 年	(期 後)
	二 五 七 三	

日  
本  
文  
學  
年  
表

中  
村  
吉  
藏

坊  
ち  
や  
ん  
三  
四  
郎  
行  
人  
明  
暗  
俳  
諧  
師

索引

あ

青表紙本……………69  
 赤染衛門……………46, 72  
 赤染衛門榮華物語……………185  
 縣居歌文……………128  
 縣居の歌集……………128  
 秋成遺文……………163  
 ●安愚樂鍋……………226  
 朱樂管江……………151  
 淺井了意……………154  
 ●淺香社……………218  
 朝比奈巡島記……………167  
 飛鳥井雅世……………89  
 足立稻直……………80  
 吾妻問答……………93  
 東歌……………27  
 阿刀忠行……………15  
 淡海三船……………34, 37  
 阿佛尼……………117  
 油糟……………138  
 油地獄……………237  
 饗庭篁村……………237  
 安倍仲麻呂……………34  
 安倍吉人……………37  
 阿彌陀の胸割……………183  
 天降言……………129  
 荒木田久老……………11  
 荒木田守武……………137  
 曠野集……………141  
 在原滋春……………62  
 在原業平……………41, 59  
 安永天明期の文學……………121

い・お

安藤爲章……………72  
 飯田武郷……………10  
 稜威言別……………11  
 伊賀越乘掛合羽……………194  
 雷太郎強惡物語……………178  
 勇山連文繼……………36  
 十六夜清心……………198  
 十六夜日記……………117  
 十六夜日記殘月抄……………117  
 石上乙麻呂……………34  
 石上宅嗣……………34  
 石川啄木……………221  
 石田未得……………150  
 石橋思案……………224, 235  
 石彫獅子の賦……………215  
 伊勢物語……………58—62  
 伊勢物語愚見抄……………62  
 伊勢物語古意……………62  
 伊勢物語拾穂抄……………62  
 伊勢物語新釋……………62  
 伊勢物語の題號……………59  
 石上私淑言……………130  
 異素六帖……………169  
 一圓紙幣の履歷晰……………230  
 市川團十郎……………250  
 一條兼良……………43, 62, 69  
 一谷嫩軍記……………193  
 一中節……………193  
 一時軒惟中……………139  
 一夜四陰……………145  
 ●一葉集……………212

いちご姫……………233  
 一茶……………146—149  
 一茶句帳……………148  
 一茶と大江丸……………146—150  
 一茶發句集……………148  
 一寸法師……………109  
 泉鏡花……………235, 240  
 和泉式部……………46  
 和泉式部日記……………80  
 和泉式部物語……………80  
 和泉流……………114  
 出雲國造神賀詞……………16  
 出雲風土記……………11  
 出雲民族……………6  
 田舎教師……………224  
 犬筑波集……………137  
 井上勤……………229  
 井上哲次郎……………205, 209  
 井上播磨掾……………183  
 井上文雄……………63  
 石清水物語……………102—103  
 不言不語……………235  
 岩野泡鳴……………213  
 巖谷小波……………224, 235  
 井原西鶴……………139, 155  
 家……………243  
 今鏡……………103  
 今橋集……………135  
 今戸心中……………241  
 今様……………57  
 今様廿四孝……………160  
 妹背山婦女庭訓……………192  
 いらつめ……………210

日本文學史概説 索引

いろは文庫 .....179  
 彌世繼 .....104  
 因果物語 .....154

う

上田秋成 .....132, 163  
 上田秋成全集 .....163  
 上田敏 .....216  
 浮雲 .....231  
 浮世草子 .....155  
 (柳髮新話)浮世床 .....176  
 (譚話)浮世風呂 .....176  
 浮世物語 .....154  
 雨月物語 .....163  
 うけらが花 .....129  
 宇治加賀掾 .....184  
 宇治拾遺物語 .....104  
 宇治十帖 .....67  
 宇治大納言隆國 .....74  
 宇治大納言物語 .....75  
 右大將道綱の母 .....76  
 うたかたの記 .....238  
 歌浄瑠璃 .....193  
 歌物語 .....58  
 宇津保物語 .....64—65  
 宇津保物語玉琴 .....65  
 鶴衣 .....146  
 優曇華物語 .....164  
 海上胤平 .....208  
 海幸山幸傳説 .....6  
 うもれ木 .....213  
 うらおもて .....240  
 浦のしほ貝 .....134  
 浦のしほ貝拾遺 .....134  
 卜部兼方 .....10  
 運命論者 .....243

え・系

英雄神 .....6  
 榮華物語 .....72—73  
 榮華物語考 .....72  
 榮華物語詳解 .....73  
 瑩玉集 .....116  
 江島其磧 .....161  
 江見水蔭 .....235  
 江見清風 .....56  
 延喜式 .....15  
 宴曲 .....93  
 宴曲集 .....94  
 宴曲抄 .....94  
 宴曲全集 .....94  
 延慶兩卿訴陳狀 .....87  
 園太曆 .....118

お・を

岡清兵衛 .....183  
 置土産 .....155  
 奥の細道 .....141  
 小栗風葉 .....235  
 尾崎紅葉 .....224, 233  
 尾崎雅嘉 .....62  
 小澤蘆庵 .....132  
 太朝臣安麻呂 .....4, 8  
 應安新式 .....92  
 大堰川行幸和歌序 .....42  
 大石千引 .....74  
 大江以言 .....149  
 大江漁夫 .....162  
 大江佐國 .....31  
 大江丸 .....149  
 大江匡衡 .....39  
 大江匡房 .....39

大鏡 .....73  
 大鏡詳解 .....74  
 大鏡新註 .....74  
 大鏡短観抄 .....74  
 大鏡註釋 .....74  
 大隈言道 .....135  
 大藏流 .....114  
 大坂獨吟集 .....139  
 凡河内躬恒 .....40—42  
 大島蓼太 .....145  
 太田蜀山 .....150  
 大殿祭 .....16  
 大友皇子 .....34  
 大塔宮囃鏡 .....190  
 大伴黒主 .....41  
 大伴旅人 .....28  
 大伴家持 .....28—29  
 大中臣安則 .....15  
 大中臣能宣 .....31, 43  
 大野洒竹 .....224  
 大祓 .....17  
 大祓詞 .....16, 20  
 大矢數 .....155  
 お染久松色讀販 .....196  
 織田純一郎 .....196  
 落合直文 .....74, 205, 210, 218  
 落窪物語 .....65—66  
 落窪物語大成 .....66  
 お伽草子 .....108—110  
 お伽婢子 .....154  
 尾上柴舟 .....218  
 小野お通 .....182  
 小野小町 .....41—42  
 小野篁 .....38  
 小野岑守 .....36  
 尾花集 .....236

か・が

於母影 .....211  
 おらが春 .....149  
 折薔薇 .....253  
 女殺油地獄 .....187

開卷驚奇俠客傳 .....168  
 慨世士傳 .....228  
 海道記 .....117  
 海底旅行 .....229  
 外來思想 .....8  
 貝おほひ .....140  
 海録 .....101  
 海潮音 .....216  
 河海抄 .....64, 69  
 香川景樹 .....43, 75, 133  
 香川景樹その他の和歌 .....133—137  
 加賀見山廓寫本 .....194  
 樂劇 .....254  
 廓中奇談 .....170  
 柿本人麻呂 .....27  
 柿本衆 .....92  
 神樂 .....53—54  
 學問のすゝめ .....202  
 蜻蛉日記 .....76  
 蜻蛉日記解環 .....77  
 蜻蛉日記考證 .....77  
 笠女郎 .....29  
 歌人に與ふる書 .....220  
 佳人之奇遇 .....227  
 鹿島紀行 .....141  
 可笑記 .....154  
 春日局 .....250  
 荷田春滿 .....62, 126  
 荷田在滿 .....126

語部 .....5  
 花鳥餘情 .....69  
 葛飾派 .....146  
 活歴物 .....249  
 家庭小説 .....242  
 加藤枝直 .....129  
 加藤曉臺 .....145  
 加藤盤齋 .....79  
 加藤弘之 .....204  
 河東節 .....193  
 河東碧梧桐 .....224  
 門三味線 .....237  
 楯取魚彦 .....129  
 金井三笑 .....193  
 假名垣魯文 .....225  
 假名草子 .....154—155  
 假名手本忠臣藏 .....191  
 金子薰園 .....218  
 金子元臣 .....43, 56, 79  
 川上眉山 .....235, 240  
 河内本 .....69  
 河内屋 .....241  
 河島皇子 .....33  
 河村秀根 .....10  
 微 .....245  
 鎌倉三代記 .....189  
 鎌倉時代文學新論 .....96  
 鎌倉室町時代文學史 .....96  
 髮結新三 .....198  
 剃刀 .....254  
 鴨長明 .....116  
 賀茂眞淵 .....32, 62, 63, 69, 127—129  
 賀茂眞淵とその時代の和歌 .....127—133  
 賀茂翁歌集 .....128

き・ぎ

鹿持雅澄 .....32  
 柄井川柳 .....152  
 我樂多文庫 .....231  
 棠大門屋敷 .....160  
 から檜葉 .....144  
 花柳春話 .....228  
 歌林良材集 .....62  
 賀陽豊年 .....36  
 閑吟集 .....95  
 菅家文章 .....38  
 観世流 .....111  
 菅家後集 .....38  
 菅三品輔正 .....39  
 邯鄲諸國物語 .....178  
 觀念小説 .....239  
 蒲原有明 .....215

其角堂永機 .....209  
 記紀の歌謠 .....23—25  
 義經記 .....100—101  
 擬古物語 .....102  
 記載文學 .....3  
 岸本由豆流 .....75  
 歸省 .....210  
 喜撰法師 .....41  
 義太夫節 .....183  
 北川眞顔 .....150  
 北畠親房 .....107  
 北村季吟 .....56, 62, 63, 69, 75, 79, 120  
 北村透谷 .....211  
 喜多流 .....111  
 紀海音 .....187—189  
 木下幸文 .....134  
 紀貫之 .....40, 42, 75

紀貫之の女……………40  
 紀時文……………31, 43  
 紀友則……………40  
 紀齊名……………39  
 黄表紙……………172—173  
 木村正辭……………32  
 京極家……………87  
 京傳の讀本……………165  
 曉鐘……………213  
 曉臺句集……………146  
 曉臺終焉記……………146  
 狂歌と川柳……………150—154  
 狂歌……………150—152  
 狂言……………114—115  
 狂言鶯蛙集……………151  
 狂言記……………114  
 教育と宗教との衝突……………205  
 俠客春雨傘……………251  
 郷土傳説……………12  
 伽羅枕……………234  
 究百集……………94  
 窮理圖解……………202  
 胡瓜圖解……………226  
 牛肉と馬鈴薯……………242  
 曲江亭桃睡……………146  
 清原元輔……………31, 43  
 玉葉集……………88  
 玉林苑……………94  
 桐一葉……………252  
 尾籠……………112  
 基督教的精神……………203  
 莫切自根金生木……………173  
 金槐集……………86  
 近古小説解題……………102  
 近古小説新纂……………102  
 近古文學序説……………82—83

近世文學序説……………121—122  
 金砂……………163  
 近世説美少年錄……………167  
 金々先生榮華夢……………172  
 琴後集……………129  
 金葉集……………48  
 金石文……………32  
 琴歌譜……………23  
 金平物……………183  
 金平淨瑠璃……………183  
 金平天狗問答……………183  
 金平廿人切……………183  
 金平法問諍……………183  
 銀鈴……………220  
 近路行者……………162

く・ぐ

空海……………37  
 愚管抄……………118  
 草枕……………246  
 草わかば……………215  
 癩癩談……………164  
 國木田獨歩……………242—243  
 國引の段……………13—14  
 桑名屋徳三入舟唄……………194  
 桑原腹赤……………37  
 九番日記……………149  
 虞美人草……………245  
 熊谷直好……………134  
 熊谷女編笠……………160  
 栗田寛……………12  
 栗本衆……………92  
 黒蜥蜴……………241  
 黒百合……………240  
 懷風藻……………33—34  
 懷風藻の性質……………33

け・げ

懷風藻の内容形式……………33  
 冠註大和物語……………63  
 軍記物語……………96—102  
 桂園一枝……………133  
 景戒……………14  
 契國策……………169  
 經國集……………34, 37  
 經國集殘篇……………38  
 經國美談……………226  
 繫思談……………228  
 慶滋保胤……………39  
 傾城阿波鳴門……………192  
 傾城色三味線……………161  
 傾城禁短氣……………161  
 契沖……………11, 32,  
 43, 62, 69, 77, 88, 125  
 契沖延寶集……………125  
 啓蒙思想……………201—204  
 啓蒙的小説……………225—229  
 外科室……………240  
 外題年鑑……………192  
 月世界旅行……………229  
 結婚説話……………15  
 月琴堂……………160  
 外物……………94  
 玄惠法師……………100  
 兼好法師……………118  
 兼好法師家集……………118  
 原始時代……………3  
 源氏物語……………66—69  
 源氏物語湖月抄……………69  
 源氏物語新釋……………69  
 源氏物語玉の小櫛……………69, 130  
 源氏物語の影響……………69

こ・こ

源氏物語の成立……………66  
 源氏物語の組織……………67—69  
 源氏物語の註釋書……………69  
 源氏物語評釋……………69  
 顯宗紀……………15  
 鎌倉比事……………160  
 源太夫……………183  
 源註拾遺……………69, 125  
 顯註密勘……………43  
 幻住庵記……………141  
 源平盛衰記……………99  
 賢諭……………7  
 見聞談叢……………155  
 視友社……………231  
 縣門遺稿……………129  
 戀川春町……………172  
 戀ざめ……………245  
 小歌……………95  
 合卷……………177—179  
 厚顔抄……………11  
 江家次第……………39  
 後室色縮編……………160  
 皇胤紹運錄……………62  
 孝女白菊の歌……………210  
 好色一代男……………155  
 好色一代女……………156  
 好色五人女……………156  
 好色物……………155  
 行人……………246  
 致證今昔物語集……………75  
 幸田露伴……………236—237  
 江談抄……………39  
 高踏派……………245  
 高野聖……………240

功利主義思想……………202  
 幸若舞……………110  
 古今夷曲集……………151  
 古學復興時代の歌……………122—127  
 古今集……………40—43  
 古今集序……………42  
 古今集序註……………43  
 古今集正義……………43  
 古今集註……………43  
 古今集遠鏡……………43  
 古今集童蒙抄……………43  
 古今集の主なる歌人……………41—42  
 古今集の三期……………40—41  
 古今集の註釋書……………43  
 古今集の編纂と組織……………40  
 古今集餘材抄……………43, 125  
 古今著聞集……………105  
 古今六帖……………40  
 古今和歌集評釋……………43  
 國家主義……………204  
 國家的精神……………6  
 國民の友……………210  
 國姓爺合戦……………185—186  
 古言梯……………129  
 古語拾遺……………23  
 心……………246  
 小さかづき……………154  
 御傘……………138  
 五重塔……………236  
 古事記……………4—8  
 古事記新講……………8  
 古事記傳……………5, 7, 8, 130  
 古事記傳略……………7  
 古事記の英譯……………8

さ・ざ

古事記の寫本と註釋書……………7—8  
 古事記の成立……………4—5  
 古事記の題號……………5  
 古史徵開題記……………20  
 古史傳……………5, 10  
 後拾遺和歌集……………46  
 小島法師……………100  
 古淨瑠璃……………182  
 小杉天外……………242  
 後撰和歌集……………43  
 後撰夷曲集……………151  
 五大力戀絨……………194  
 蝴蝶……………233  
 滑稽富士詣……………225  
 滑稽本……………173—177  
 滑稽和合人……………177  
 古點……………31  
 後鳥羽上皇……………85  
 詞の玉緒……………130  
 木間星箱根鹿笛……………248  
 古風土記逸文……………12  
 古風土記逸文考證……………12  
 小木……………168  
 古物語類字抄……………103  
 金剛流……………111  
 金色夜叉……………235  
 今昔物語……………74  
 菟藪本……………168  
 今春流……………111

齋藤綠雨 .....237  
 催馬樂 .....54—56  
 西府新詩 .....38  
 坂田藤十郎 .....190  
 坂徴 .....77  
 嵯峨天皇 .....14, 37  
 嵯峨日記 .....141  
 坂上郎女 .....29  
 坂上望城 .....31, 43  
 防人の歌 .....27  
 鶯流 .....114  
 櫻田治助 .....193  
 櫻姫全傳曙草紙 .....165  
 狭衣系圖 .....70  
 狭衣物語 .....69—70  
 狭衣物語下紐 .....70  
 笹川臨風 .....224  
 佐佐木信綱 .....220  
 佐々醒雪 .....224  
 きざれ石 .....123  
 薩摩淨雲 .....183  
 佐藤義清 .....51  
 里のをだまき .....171  
 里見八大傳 .....167  
 里村昌琢 .....139  
 讃岐典侍日記 .....81  
 亮々遺稿 .....134  
 猿蓑 .....141  
 澤田東江 .....169  
 澤村宗十郎 .....194  
 更級日記 .....80  
 山家集 .....51  
 三教指歸 .....37  
 三十石體始 .....194  
 三千世界商往來 .....194  
 山東京傳 .....165

三人吉三 .....198  
 三人妻 .....234  
 三七全傳南柯夢 .....167  
 三馬 .....176  
 樓門五山桐(金門五山桐) .....194

し・じ

該撒奇談 .....248  
 次韻 .....140  
 十三夜 .....239  
 詞花集 .....48  
 四季物語 .....116  
 紫吟社 .....224  
 史劇 .....249—250  
 滋野貞主 .....37  
 自然主義時代の小説 .....242—247  
 自然主義的思想 .....207  
 自然神 .....6  
 自撰晚花集 .....124  
 七部集 .....141  
 七番日記 .....149  
 時代物 .....185—186  
 十訓抄 .....104  
 十訓抄考 .....104  
 十訓抄詳解 .....105  
 十返舎一九 .....173  
 次點 .....31  
 四天王 .....91  
 志濃夫廻舎家集 .....135  
 鹽井雨江 .....218  
 清水宣昭 .....80  
 島崎藤村 .....212, 242  
 島衛月白浪 .....249  
 島村抱月 .....207

下河邊長流 .....123  
 釋阿 .....49  
 釋日本紀 .....10, 12  
 社會劇 .....254  
 洒落本 .....168—172  
 拾遺和歌集 .....45  
 拾遺愚草 .....85  
 拾遺狂言記 .....115  
 拾葉集 .....94  
 拾葉抄 .....94  
 自由詩社 .....218  
 自由思想 .....203  
 秋聲會 .....224  
 春葉集 .....126  
 春鶯轉 .....229  
 俊寛僧都鳥物語 .....167  
 春色梅曆 .....179  
 春色辰巳園 .....179  
 春秋庵幹雄 .....209  
 春鳥集 .....215  
 春泥集 .....219  
 春風馬堤曲 .....144  
 上古文學序説 .....3—4  
 上宮聖德法王帝説 .....23  
 正三位物語 .....102  
 聖德太子 .....8  
 初期の俳諧 .....137—143  
 蜀山百首 .....151  
 續日本紀 .....11, 38  
 小詩國 .....220  
 松染情史秋の七草 .....167  
 小説神髓 .....229  
 詔勅 .....20  
 宵柏 .....92  
 生白庵行風 .....151  
 淨瑠璃十二段草子 .....182

性靈集 .....37  
 諸道聽耳世間猿 .....164  
 調高矣洋絃一曲 .....253  
 白き手の獵人 .....216  
 新浦島 .....236  
 人格神 .....6  
 新樂劇論 .....254  
 神祇文學 .....15—23  
 眞曲抄 .....94  
 新曲浦島 .....254  
 新曲赫夜姫 .....254  
 新曲金毛狐 .....254  
 新曲初夢 .....254  
 新月 .....220  
 人權新説 .....204  
 新現實主義 .....254  
 深刻小説 .....241  
 新古今集の歌人 .....84—85  
 新古今集以後の勅撰集 .....87  
 新古今和歌集 .....83—86  
 新後撰集 .....88  
 新後拾遺集 .....89  
 神事祝言能 .....112  
 壬二集 .....85  
 人事能 .....113  
 新拾遺和歌集 .....89  
 新千載集 .....89  
 新撰髓腦 .....46  
 新撰和歌集 .....42  
 新撰萬葉集 .....39—40  
 新撰朗詠集 .....56  
 新續古今集 .....89  
 神代紀 .....209  
 神代卷 .....5  
 新體詩抄 .....209  
 新體詩選 .....210

新體詩歌集 .....211  
 新體詩の發生 .....208—210  
 新體梅花詩集 .....211  
 心中天の網鳥 .....187  
 心中宵庚申 .....187  
 心中二つ腹帯 .....189  
 新勅撰集 .....88  
 新勅撰集抄 .....88  
 新筑波集 .....93  
 新點 .....31  
 新著百種 .....233  
 神皇正統記 .....107  
 新花摘 .....145  
 眞福寺本古事記 .....7  
 人文神 .....6  
 新派劇 .....253  
 (お染久松)新版歌祭文 192  
 新編お伽草子 .....110  
 新葉集 .....89—90  
 新葉集標註 .....90  
 神靈矢口渡 .....193  
 神話 .....5  
 神話傳説文學 .....4—15

す・ず

水原抄 .....69  
 末廣鐵腸 .....228  
 末松謙澄 .....229  
 菅原清公 .....36  
 菅原孝標の女 .....80  
 菅原傳授手習鑑 .....191  
 菅原道眞 .....38, 39  
 菅谷高政 .....139  
 還魂紙料 .....178  
 鈴木弘恭 .....74  
 鈴木重胤 .....10, 20

鈴木正三 .....154  
 薄田泣菫 .....214  
 炭俵 .....141  
 隅田川梅柳新書 .....198  
 隅田川花御所染 .....196  
 住吉物語 .....66

せ・ぜ

世阿彌 .....111  
 世阿彌十六部集 .....111  
 生 .....242  
 勢語臆斷 .....125  
 清巖茶話 .....104  
 政教社 .....205  
 清少納言 .....78  
 政治小説 .....226  
 政談青砥碑 .....225  
 静夜 .....220  
 聖遊廓 .....169  
 世界國盡 .....202  
 世界聖典全集 .....5  
 西洋事情 .....225  
 西洋膝栗毛 .....225  
 精靈能 .....112  
 關取千兩幟 .....192  
 關根正直 .....74  
 關直彦 .....228  
 世間息子氣貫 .....161  
 世間娘氣貫 .....161  
 世間妾氣貫 .....164  
 絶對神 .....6  
 雪中梅 .....228  
 世話物 .....186—187  
 仙覺 .....31, 32  
 仙覺抄 .....12  
 千載集 .....49

千紫萬紅 .....151  
撰集抄 .....52  
先代の舊辭 .....4  
船頭深話 .....169  
宣命 .....20—23  
宣命體 .....21  
宣命の意義 .....20—21  
宣命の特質 .....21—23  
川柳 .....152—154

**そ・ぞ**

草庵集 .....90  
草庵集玉筍 .....91  
宗祇 .....32, 92  
草徑集 .....135  
僧正遍昭 .....41  
宗長 .....92  
宗長日記 .....182  
雙蝶記 .....165  
雙蝶のわかれ .....211  
相馬御風 .....218  
曾我物語 .....101—102  
續和泉式部集 .....46  
續狂言記 .....115  
續古今集 .....88  
續後撰集 .....88  
續後拾遺集 .....88  
續猿蓑 .....141  
續拾遺集 .....88  
續千載集 .....88  
續草徑集 .....135  
續俳諧集 .....247  
續膝栗毛 .....174  
續萬葉集 .....24  
續虛栗 .....141  
楚囚の詩 .....211

曾禰好忠 .....46  
曾根崎心中 .....186  
其面影 .....245  
天うつ波 .....237  
それから .....246

**た・だ**

台記別記 .....15  
體言抄 .....54  
大抵御覽 .....169  
太平記 .....99—100  
太平記忠臣講釋 .....192  
太平記理盡抄 .....100  
高崎正風 .....208  
高橋蟲麻呂 .....29  
高濱虚子 .....223, 247  
高天原 .....6  
誰が身の上 .....154  
高山樗牛 .....205—207  
瀧澤馬琴 .....166  
瀧亭鯉丈 .....177  
たけくらべ .....239  
竹田出雲 .....190—191  
高市黒人 .....29  
竹取物語 .....63—64  
竹取物語解 .....64  
建部綾足 .....162  
竹本義太夫 .....183  
多情多恨 .....235  
田代松意(談林軒) .....138  
多田南嶺 .....161  
爛 .....245  
橘曙覧 .....135  
橘守部 .....11  
橘諸兄 .....25  
辰巳の園 .....171

狸祭書屋俳話 .....228  
田中大秀 .....64  
田中常矩 .....139  
田中道麻呂 .....64  
谷川士清 .....10  
谷崎潤一郎 .....247  
谷間の姫百合 .....229  
玉匡兩浦島 .....253  
爲永春水 .....179  
田安宗武 .....129  
田山花袋 .....244  
單式能 .....112  
炭太祇 .....145  
丹後太夫 .....183  
丹波太夫 .....183  
談林派 .....138

**ち・ち**

近松半二 .....192  
近松門左衛門 .....184—187  
茅上女郎 .....29  
畜生腹 .....241  
地名傳説 .....12  
チャンブレン .....8  
中古文學序説 .....35—36  
忠臣水滸傳 .....165  
晝夜用心記 .....160  
長詩 .....210  
町人物 .....157  
朝野群載 .....11, 39  
椿説弓張月 .....167

**つ・づ**

盡用二分狂言 .....165  
都賀庭鐘 .....162  
次田潤 .....8, 20

辻淨瑠璃 .....237  
津打治兵衛 .....193  
筑波會 .....224  
筑波集 .....92  
筑波問答 .....92  
土井晩翠 .....212  
堤中納言物語 .....71  
藤蓑册子 .....132  
綱島梁川 .....206  
角田竹冷 .....224  
壺井義知 .....80  
坪内逍遙 .....228, 229, 251  
つぼすみれ .....210  
妻 .....244  
露園々 .....236  
貫之躬恒時代 .....40  
鶴屋南北 .....196—197  
徒然草 .....118—120  
徒然草講話 .....120  
徒然草諸抄大成 .....120  
徒然草文段抄 .....120

**て・て**

帝紀 .....4  
帝皇日繼 .....4  
手柄岡持 .....150  
照葉狂言 .....240  
傳奇作書 .....194  
傳奇的物語 .....58  
傳誦文學 .....3  
傳説物語 .....72  
天孫民族 .....6  
天地有情 .....212  
天地玄黄 .....213  
天道浮世之出星操 .....176  
天賦人權論 .....203

天武天皇 .....4  
田螺金魚 .....171

**と・ど**

洞院公定日記 .....100  
東海散士 .....227  
東海道中膝栗毛 .....174  
東海道名所記 .....175  
東海道四谷怪談 .....196  
東海遊士吟 .....213  
東關紀行 .....117  
東西南北 .....213  
當世乙女織 .....160  
當世書世氣質 .....230  
道中粹語録 .....175  
唐來三和 .....173  
戸川殘花 .....224  
土岐哀果 .....221  
獨吟千句 .....138  
獨絃哀歌 .....215  
徳田秋聲 .....245  
徳富蘆花 .....242  
徳和歌後萬載集 .....151  
何處へ .....245  
土佐日記 .....75—76  
土佐日記考證 .....76  
土佐日記抄 .....76  
土佐日記創見 .....76  
土佐日記燈 .....76  
新年祭 .....16  
戸田茂睡 .....123  
隣の女 .....235  
舍人親王 .....8  
外山正一 .....209  
豊竹若太夫 .....187  
とりかへばや物語 .....71

とりのあと .....123  
泥人形 .....245  
頓阿 .....90—91

**な**

内藤鳴雪 .....223  
中江篤介 .....203  
中西梅花 .....211  
中臣壽詞 .....15  
中院通勝 .....69  
奈河龜助 .....194  
奈河七五三助 .....194  
奈河篤助 .....194  
中原師香 .....97  
中村吉藏 .....254  
中村秋香 .....66  
中山忠親 .....103  
長門太夫 .....183  
牛井卜養 .....150  
梨壺の五人 .....31, 43  
梨本集 .....123  
夏草 .....212  
夏木立 .....232  
夏目漱石 .....223, 245  
難波雀 .....155  
難波土産 .....192  
魚彦歌集 .....129  
並木五瓶 .....194  
並木正三 .....194  
並木宗輔 .....193  
奈良時代 .....4  
南閩雜話 .....171  
男色大鑑 .....159

**に**

新島襄 .....203



ニイチエ主義 .....206  
 新學異見 .....133  
 にごりえ .....239  
 錦文流 .....160  
 西澤一風 .....160  
 修紫田舎源氏 .....178  
 西山宗因 .....139  
 西山物語 .....162  
 日蓮聖人辻説法 .....253  
 二條家 .....87  
 二條良基 .....92  
 二入女房 .....234  
 二人比丘尼 .....154  
 二人比丘尼色懺悔 .....233  
 日本永代蔵 .....157  
 日本歌選上古篇 .....24  
 日本紀歌廻解 .....11  
 日本國現報善惡靈異記  
 .....14—15  
 日本主義 .....206  
 日本書紀 .....8—11  
 日本書紀集解 .....10  
 日本書紀通證 .....10  
 日本書紀通釋 .....10  
 日本書紀傳 .....10  
 日本書紀の成立 .....8  
 日本書紀の組織 .....9—10  
 日本新永代蔵 .....160  
 日本第一和布刈神事 .....194  
 日本的思想の自覺 .....  
 .....204—207  
 日本文学史とその區劃 .....1  
 日本文学全書 .....205  
 如鑑子 .....154  
 人情本 .....179—181  
 人皇紀 .....9

ぬ

額田女王 .....29  
 沼波瓊音 .....120  
 ぬれ衣 .....224, 233

ね

鼠小僧 .....198  
 根無草 .....172

の

能因 .....49  
 凌霄花 .....220  
 野ざらし紀行 .....141  
 祝詞 .....15—20  
 祝詞解 .....20  
 祝詞考 .....20  
 祝詞講義 .....20  
 祝詞新講 .....20  
 祝詞の研究書 .....20  
 祝詞の作者 .....16—17  
 祝詞の性質及組織 .....17—18  
 祝詞の成立 .....15—16

は・ば

俳諧玉藻集 .....145  
 俳諧懺悔 .....149  
 俳諧師 .....247  
 俳諧寺一茶 .....146  
 俳諧袋 .....149  
 梅花氷裂 .....165  
 俳人蕪村 .....222  
 梅亭金鷲 .....177  
 卯辰紀行 .....141  
 破戒 .....243  
 博多小女郎浪枕 .....187

白氏文集 .....56  
 萩原廣道 .....69  
 白羊宮 .....215  
 芭蕉雜談 .....222  
 長谷川天溪 .....207  
 鉢かづき .....108  
 鉢かづき姫 .....254  
 八丈綺談 .....167  
 八番日記 .....149  
 八文字屋自笑 .....161  
 八文字屋本 .....161  
 初懐紙 .....141  
 初戀 .....238  
 はつ委 .....242  
 鏡伊勢物語 .....194  
 花車 .....233  
 花暦八笑人 .....177  
 花間鶯 .....228  
 別座敷 .....141  
 濱松中納言物語 .....71  
 葉室大納言時長 .....97  
 馬場辰猪 .....203  
 播磨風土記 .....11  
 春 .....243  
 春雨物語 .....164  
 春の日 .....141  
 春廻舎漫筆 .....230  
 晩花集 .....124  
 萬載狂歌集 .....151  
 萬紫千紅 .....151  
 般若驗記 .....15  
 伴信友 .....12  
 伴久永 .....15

ひ・び

稗田阿禮 .....4

僻言調 .....123  
 樋口一葉 .....239  
 髯男 .....237  
 ひきご .....141  
 悲惨小説 .....241  
 肥前風土記 .....11  
 常陸風土記 .....11  
 竹突集 .....48  
 ひとりごち .....135  
 百八町記 .....154  
 標註古風土記 .....12  
 平賀元義 .....135  
 平賀元義集 .....135  
 平田篤胤 .....5, 10, 20  
 平山藤五 .....155  
 廣津柳浪 .....241  
 貧窮百首 .....134

ふ・ぶ

風雲集 .....197  
 風雅集 .....89  
 風來山人 .....171  
 風流今平家 .....160  
 風流志道軒傳 .....171  
 風流佛 .....236  
 風流微塵藏 .....236  
 福内鬼外 .....193  
 福澤全集 .....202  
 福澤諭吉 .....202  
 復讐奇談安積沼 .....165  
 複式能 .....112  
 福地櫻痴 .....250  
 袋草紙 .....25  
 武家物 .....158  
 武家義理物語 .....158  
 武道傳來記 .....158

扶桑集 .....38  
 双蝶々曲輪日記 .....191  
 二葉亭四迷 .....230  
 佛足石歌碑 .....32—33  
 蒲團 .....244  
 風土記 .....11—14  
 風土記の成立 .....11  
 藤田鳴鶴 .....228  
 藤原顯輔 .....48  
 藤原明衡 .....38  
 藤原家隆 .....85  
 藤原宇合 .....34  
 藤原清輔 .....25  
 藤原清貫 .....15  
 藤原公任 .....45, 56  
 藤原顯昭 .....43  
 藤原定家 .....25, 43, 84, 88  
 藤原季綱 .....39  
 藤原孝言 .....31  
 藤原忠平 .....15  
 藤原爲家 .....87  
 藤原俊成(顯廣) .....49  
 藤原基俊 .....31, 48, 56  
 藤原冬嗣 .....37  
 藤原行成 .....56  
 富士谷御杖 .....75  
 藤井高尙 .....61  
 蕪村 .....143—145  
 蕪村とその時代の俳諧 143  
 蕪村翁句集 .....145  
 蕪村翁文集 .....145  
 婦美車紫鹿子 .....171  
 文づかひ .....238  
 冬の日 .....141  
 古河黙阿彌 .....198, 248  
 フルコトブミ .....5

文学界 .....243  
 文学史の意義 .....1—2  
 文学の發生時代 .....3  
 文学史編述の態度 .....2  
 豊後風土記 .....11  
 文鏡秘府論 .....37  
 文華秘麗集 .....37  
 文化文政期の文学 .....122  
 文筆眼心抄 .....37  
 文屋康秀 .....41

へ・べ

平安時代後期の漢詩文 .....38  
 平安時代中期の漢詩文 .....39  
 平家物語 .....97  
 平治物語 .....97  
 平凡 .....245  
 別紙追加曲 .....94  
 變目傳 .....241

ほ・ぼ

寶生流 .....111  
 方丈記 .....116—117  
 方丈記諺解 .....117  
 方丈記酒説 .....116  
 北條園水 .....160  
 北條時鄰 .....117  
 北條時頼記 .....193  
 放屁論 .....172  
 蓬萊曲 .....211  
 蓬萊山人歸橋 .....171  
 壽詞 .....17  
 保元物語 .....97  
 星月夜 .....252  
 鎮火祭 .....17  
 戊午集 .....135

細井貞雄……………65  
 細川幽齋……………62  
 坊ちゃん……………246  
 穂積以貫……………192  
 暮笛集……………214  
 不如歸……………253  
 杏手鳥孤城落月……………252  
 堀越茶陽……………193  
 ほり出し物……………237  
 本海道虎ヶ谷……………160  
 本辭……………4  
 本朝水滸傳……………162  
 本朝醉菩提……………165  
 本朝智慧鑑……………160  
 本朝二十四孝……………192  
 本朝無題詩……………39  
 本朝文粹……………38  
 本朝麗藻……………38  
 翻譯劇……………254  
 翻譯小説……………228

ま

舞の詞の組織……………111  
 舞の本……………110—111  
 舞の本の製作者と製作年代……………110—112  
 舞姫(與謝野品子)……………219  
 舞姫(森鷗外)……………238  
 枕草子……………77—79  
 枕草子抄……………79  
 枕草子春曙抄……………79  
 枕草子通釋……………79  
 枕草子評釋……………79  
 正岡子規……………220, 222  
 正宗白鳥……………245  
 増鏡……………106

増鏡詳解……………107  
 松木琴園……………65  
 松永貞徳……………138  
 松波遊山……………208  
 松尾芭蕉……………139—143  
 漫吟集類題……………125  
 萬葉集……………25—32  
 萬葉集管見……………124  
 萬葉集古義……………32  
 萬葉集作者未詳の歌……………29  
 萬葉集代匠記……………32, 125  
 萬葉集玉の小琴……………130  
 萬葉集註釋……………32  
 萬葉集の研究及註釋書……………31—32  
 萬葉集の主なる歌人……………27—29  
 萬葉集の撰者……………25—26  
 萬葉集の組織……………26—27  
 萬葉集の用字法……………27  
 萬葉集美夫君志……………32  
 萬葉集略解……………129  
 萬葉集辭案抄……………125

み

御門祭……………16  
 三木露風……………217  
 亂れ髪……………219  
 水鏡……………103—104  
 虛栗……………141  
 水無瀬三吟百韻……………93  
 南淵弘貞……………37  
 源國信……………31  
 源實朝……………86  
 源順……………31  
 源親行……………118

源經信……………48  
 源俊賴……………48  
 源英明……………39  
 源光行……………69, 118  
 源師頼……………31  
 壬生忠岑……………40  
 明星派……………219  
 三宅雪嶺……………205  
 都の花……………231  
 都良香……………38  
 宮崎湖處子……………210  
 妙覺寺本……………104  
 妙竹林話七偏人……………177  
 三善爲康……………39  
 岷江入楚……………69  
 民約譯解……………203  
 民友社……………205

む

昔語稻妻表紙……………165  
 武蔵野……………233  
 夢想兵衛胡蝶物語……………167  
 夢中山人寐言先生……………171  
 武藤元信……………79  
 胸算用……………157  
 無名抄……………116  
 村井長庵巧破傘……………198  
 村上浪六……………242  
 むらさき……………213  
 紫式部日記……………79  
 紫式部日記解……………80  
 紫式部日記釋……………80  
 紫式部日記傍註……………80  
 むら竹……………237  
 村田春海……………129  
 室壽詞……………15

室町時代小歌集……………95

め

明暗……………246  
 明誠堂喜三二……………173  
 明治初期の和歌俳諧……………208—209  
 冥土の飛脚……………187  
 冥報記……………15  
 めでた百首夷歌……………151

も

本居内造……………59  
 本居宣長……………5, 20, 23, 43, 69, 129  
 森鷗外……………211, 237  
 森鷗外の翻譯劇……………253  
 交響上人勸進帳……………250  
 文選……………56

や

夜行巡查……………240  
 矢崎崎峨の舎……………238  
 八島……………183  
 安野文繼……………37  
 矢田部良吉……………209  
 宿屋飯盛……………150  
 柳樽……………153  
 矢野龍溪……………226  
 八百屋お七……………189  
 山岡元鄰……………154  
 山崎宗鑑……………137  
 山田美妙……………210, 232  
 山手馬鹿人……………171  
 東西文忌部獻横刀時呪……………16  
 大和物語……………62—63

大和物語直解……………63  
 山上憶良……………27  
 山邊赤人……………27  
 闇櫻……………239

ゆ

唯美派……………247  
 由阿……………32  
 幽玄體……………49  
 遊子方言……………170  
 有心體……………85  
 遊仙窟……………56  
 遊離說話……………5, 12  
 ゆく春……………214  
 湯島詣……………240

よ

謡曲……………111—114  
 謡曲の構造……………112  
 謡曲の種類……………112—113  
 用捨箱……………178  
 横井也有……………145  
 與謝野品子……………219  
 與謝野品子集……………219  
 與謝野鐵幹……………213, 218  
 與謝蕪村……………143  
 吉岡徳明……………7  
 義經千本櫻……………191  
 義時の最後……………252  
 吉野拾遺……………107—108  
 吉野拾遺名歌譽……………250  
 良岑安世……………37, 41  
 依田學海……………250  
 世繼……………72  
 四辻善成……………69  
 淀河……………138

夜半の寢覺……………71  
 餘裕派……………245  
 讀人知らずの歌……………40  
 讀本……………161—168  
 四方赤良……………150

ら

落梅花……………146

り

柳亭種彦……………177  
 六合雜誌……………204  
 六國史……………11, 38  
 凌雲集……………36—37  
 凌雲新集……………36  
 良寛……………135  
 梁塵後抄……………134  
 梁塵秘抄……………57—58

る

流轉……………238

れ

俗人……………220  
 冷泉家……………87  
 冷熱……………235  
 歴史傳説……………6  
 歴史物語……………72, 102  
 歴朝詔詞解……………23  
 列傳體小説史……………163  
 連歌……………91—93  
 連歌の起原……………91—92  
 戀慕流……………242

ろ

朗詠……………56—57

六帖詠草	132	我思	220	和漢朗詠集註	56
六帖詠草拾遺	132	我おもしろ	151	脇能	112
六歌仙時代	40	若菜集	221	和讃	57
蘆荻集	151	我輩は猫である	246	和字正濫抄	125
倫敦塔	246	若山牧水	221	畏	244
		和漢朗詠集	56	和名抄	54
		和漢朗詠集新釋	56		

わ

昭和七年十月廿五日印刷  
昭和七年十月廿九日發行

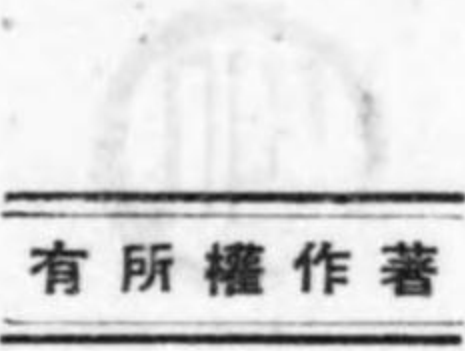
日本文學史概說  
定價金一圓五十錢

著者 藤村作

發行者 矢島一三

印刷者 白井赫太郎

印刷所 精興社印刷所



著作權所有

發行所

東京市神田區表神保町  
振替東京四一二三番

中興

(電話神田一二三五)



東京帝國大學  
文學部教授

文學博士 藤村 作先生編

◇國文學の權威が筆を揃へて◇

日本文學聯講 第一卷

上製函入頗美本  
定價金 二圓  
郵税金 十二錢

者筆執の其と容内

- 一、國文學講座の開設に就いて……東京帝國大學文學部教授文學博士 藤村 作
- 二、上代文學概説……東京女子高等師範學校教授文學博士 尾上 八郎
- 三、古事記と日本神話……法政大學文學部教授文學士 小山龍之輔
- 四、祝詞と神と政治……法政大學文學部教授文學士 小山龍之輔
- 五、萬葉集と文學生活……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜一
- 六、古今集より新古今集まで……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜一
- 七、源氏物語と宮廷生活……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津 久基
- 八、枕草子と清少納言……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津 久基
- 九、日記文學と女性……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜一
- 一〇、大鏡と道長時代……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津 久基
- 一一、西行と實朝……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜一

館興中

町保神表區田神市京東  
番三二一四京東替振

所行發

東京帝國大學  
文學部教授

文學博士 藤村 作先生編

日本文學聯講 第二卷

上製函入頗美本  
定價金 三圓二十錢  
郵税金 十四錢

者筆執の其と容内

- 一、近古文學概説……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜一
- 二、軍記物語の性質……東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜一
- 三、平家物語と時代精神……第一高等學校教授文學士 沼澤 龍雄
- 四、太平記と吉野時代の武士……武藏高等學校教授文學博士 高木 武
- 五、徒然草の思想……女子學習院教授文學士 佐藤 幹一
- 六、義經記と義經傳説の展開……前東京帝國大學文學部助教授文學士 島津 久基
- 七、仇討文學としての曾我物語……東京文理科大學助教授文學士 山岸 徳平
- 八、能樂の藝術的性質……女子學習院教授文學士 佐成謙太郎
- 九、世阿彌の藝術觀……女子學習院教授文學士 佐成謙太郎
- 一〇、狂言と世相……東京高等學校教授 野村 八良
- 一一、連歌と時代……東京帝國大學文學部講師文學士 志田 義秀

◇其の専門の研究を發表せる叢書◇

館興中

町保神表區田神市京東  
番三二一四京東替振

所行發

◇近世文學の精粹を講説した◇

東京帝國大學 文學部教授 文學博士 藤村 作先生編

日本文學聯講 第三卷 近世「上」

上製函入頗美本  
定價金壹圓八十錢  
郵税金十二錢

何れも其の専門に研究された權威ある蘊蓄を披瀝されて居ります。大學講座の開放若しくは延長とも云ふべく、特色ある而も得難き文獻であります。

内容及執筆者

- 一、國學の精神……………東京帝國大學文學部助教授文學士 久松 潜 一
- 二、浮世草紙概説……………早稻田大學文學部教授 山 口 剛
- 三、井原西鶴……………早稻田大學文學部教授 山 口 剛
- 四、近世生活と文學……………東京帝國大學文學部教授文學博士 藤 村 作
- 五、淨瑠璃概説……………故 黒 木 勘 藏
- 六、近松門左衛門……………故 黒 木 勘 藏
- 七、俳諧概説……………東京帝國大學文學部講師文學士 志 田 義 秀
- 八、松尾芭蕉……………東京帝國大學文學部講師文學士 志 田 義 秀
- 九、阿國歌舞伎の元祿劇まで……………東京帝國大學文學部講師文學博士 高 野 辰 之

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 番三二一四京東替振

東京帝國大學 文學部教授

文學博士 藤村 作先生編

日本文學聯講 第四卷 近世「下」

上製函入頗美本  
定價金三圓五十錢  
郵税金十四錢

我が國文學は、近世の後半期に至り所謂民衆文學の方面に異常の發達を見ました。江戸文學が夫れであります。本書は江戸文學研究家として夫々の方面に専門的の權威を有せらるゝ諸先生によりて執筆せられ、各篇各様の異彩を放ち、他に見ることの出來ぬ多くのオーソリティーを持つて居ります。

精華を放つて 本書の内容

- 一、江戸歌舞伎……………第一高等學校教授文學士 守 隨 憲 治
- 二、馬琴の讀本……………旅順工科大学豫科教授文學士 重 友 毅
- 三、山東京傳と黄表紙……………早稻田大學文學部教授 山 口 剛
- 四、人情本の世界……………國學院大學教授文學士 山 崎 麓
- 五、川柳と江戸生活……………第五高等學校教授文學士 田 中 辰 二
- 六、通と洒落本……………京城帝國大學文學部助教授文學士 麻 生 磯
- 七、滑稽本と遊戯生活……………東京帝國大學文學部教授文學博士 藤 村 作

◇江戸時代文學の聯合講座！◇

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 番三二一四京東替振

◇ 古典の原本を讀む力を養ふための演習書 ◇

東京帝國大學 文學部教授 文學博士藤村 作先生編 [中世篇・近世篇 近刊]

國文學聚影 上世篇

上製美本全壹冊  
全部寫眞凸版印刷  
定價金一圓八十錢  
送料 金 十錢

大學若しくは専門學校の國語科・國文科の教科書が、多く活字本ばかりであつた爲め、古文書を讀む力が一般に不足して來たことは事實であります。

ところが國文學を研究するに、古寫本・古版本を自由に讀み得る力を持たなくては、遂に十分の効果を擧げることの出來ぬことは、亦周知の事實であります。

此の缺陷を補はんがために、本書は原本其の儘を寫眞版とし、刊行されたものでありますが、力めて纏まつた節・句を採り、各種の書體様式を示しつゝ之を系統的に排列し、大和時代と平安時代とに分ち、更に各時代を文學の形態により詩歌・物語・日記・隨筆等に分けてあります。

今左に其の收載した書名を掲げます。何れも學界に定評ある古寫本・古版本から採つたもので、中には本書により初めて複製された珍籍もあります。

- 第一篇 大和時代篇 古事記 日本書紀斷簡 延喜式祝詞 祝詞考 宣命 出雲風土記 播磨風土記 古語拾遺 桂本萬葉集 金澤本萬葉集 元曆校本萬葉集 懷風藻
- 第二篇 平安時代篇 文華秀麗集 經國集 高野切古今集 筋切古今集 嘉祿本古今集 金葉集 千載和歌集 神樂譜 天治本催馬樂抄 和漢朗詠集 梁塵秘抄卷一歌合 伊勢物語 竹取物語 落窪物語 宇津保物語 俊蔭卷 源氏物語 狭衣物語 堤中納言物語 夜半の寢覺 大鏡 土佐日記 蜻蛉日記 枕草子繪卷 詞書 枕草子 更級日記

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 振替東京一四二一三番

文學士島津久基先生著

△別圖 銅版・凸版五葉  
△附圖 系圖其他六葉

對源氏物語講話

上製美本全壹冊  
總紙數五百六十頁  
定價金三圓九十錢  
送料 金 十六錢

▽其の口譯のなだらかさ、巧妙さが、現代人にびたつと合つて、一般の人々に難解だと言はれて居た源氏物語を巧に現代化された著者の手腕は、先づ在來の國學者を驚かしました。

▽鑑賞を第一の指標として居るため、下段の口譯だけを通讀しても、立派な大小説となつて居ります。

▽而も『釋評』の部や、語義・餘釋・參考・序説等には、源氏學者としての著者の蘊蓄を傾けた有益の研究が隨所に見出だされ、紫式部の心魂を解剖批判し、古代精神を現代生活に觸れしめつゝ、喚び起し、説き來るところに、著者の鬼才と生氣が漲り、稀に見る異彩を放つて居ると賞められて居ります。

▽本書は、桐壺・帚木の二卷を收めたものでありますが、他の卷々にも亘り、他の作品・作家との對比、時代・社會との交渉、文學史・文化史等の諸方面からの考察をもしてありますから、此の一冊で源氏物語が分かると言はれて居ります。

■ 原文對照逐語現代譯の一大勞作 ■

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 振替東京一四二一三番

◇眞摯な努力の結晶は果然學界に衝動を起した◇

文學博士 尾上八郎先生序 安田喜代門・池田正俊先生共著

# 古今和歌集

上製函入美本全壹冊  
總紙數六百餘頁  
定價 金三圓八十錢  
郵稅 金十六錢

## 内容

古今集概説—紀貫之論—古今和歌集序—歌詠—讀人知らずの歌(題しらすの歌—題ある歌)—  
讀人明かな歌(第一期・第二期)—古今和歌集序(紀貫之)—難語解釋通覽—初句索引—原本順  
索引—人名索引—地名索引—古今集年表—古今集系圖(皇室皇胤—藤原氏—紀氏—小野氏—  
橘氏—大江氏)—古今集地圖。

▼古今和歌集の歌全體を作家別に編成し、又年代順に列べて、其作家の個性を基として、古今集に新しい展望と鑑賞法とを齎らした。対照『古今和歌集』は、果然學界に大きな衝動を與へました。  
▼從來の舊い古今集研究の型を打破して、當然なさねばならぬ新しき研究方法によつて、古今集を縦横に展開し、平明にして明快な、而も作者の感じをよく表現した口譯を附し、諸本と對照し、核心に觸れしめつゝ、理會せしめんことに努力した本書が、學者の間に、好感と推賞とを以て迎へられつゝあることは、明かに國文學の研究方法が目覺めつゝあることを物語つて居ります。

# 古今集研究の權威

▼眞に古今集の琴線に觸れ、心行くまで其の展望と鑑賞とを恣にする人は御讀み下さい  
▼古今の諸學者が如何に古今集の難語句に解釋を與へたかを總覽した人は本書の附録を御覽下さい  
▼文檢の國語科が從來の舊い型の答案にパスし得ぬ體驗の有る人は速にこの新研究を御讀み下さい

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 振替東京四一三番

# 新時代國文學研究叢書 第一卷

成蹊高等學校教授 文學士 阪口玄章先生著

## 口譯 對照 平家物語評釋

菊判函入美本全一冊  
總紙數壹千頁  
定價 金六圓五十錢  
郵稅 金二十二錢

# 本書の特色

- 〔一〕上段に『原文』を掲げ、下段に『口譯』をなし、對照して其の『通釋』を知らしめました。
- 〔二〕而して其の各節の終りには『語釋』として、原文中の難解の語句を挙げ、嚴密にして簡明なる註釋を試み、必要に応じて夫々の圖を挿みて説明を補けてあります。尙ほ『評』の一項を置き、時に其の節に對し内容又は文の構成を批評しました。
- 〔三〕從來、平家物語を註釋したものは、かなり多く出て居りますが、正鵠を得たものが少く、新しき國文學の見方によりて之を考察し、鳥瞰し、鑑賞したものは殆ど見當らないので、こゝに新しき國文學者によりて、此の新しき計畫を進め、第一卷として本書を刊行致しました。
- 〔四〕尙ほ附録として、甲冑圖・百鍊抄拔要・略年表・僧官位略表など本文の理解に有效なるものを收め、多くの特色を保有して居ります。

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 振替東京四一三番



◆近古文学研究の權威◆

文學士島津久基先生編著「稀觀書の新刊」

近古小説新纂 初輯

上製美本全一冊  
總紙數七百餘頁  
定價金六圓  
郵税金二十二錢

本輯には嘗て刊行せられた『御伽草子』(今泉・島山二氏校訂)・『新編御伽草子』(森野博士輯)・『室町時代小説集』(平出氏校訂)・『御伽草子』(藤井博士校訂)の四書に載せられて居ないもの十五種を収めてあります。特に舞の本『日本記』以下三番の如きは『新群書類從』にも漏れてゐる貴重な資料であります。

本文は原文のまゝとし、一字一句を改めず、たゞ振漢字を施し、頭註に考異と特殊語の釋義と、参照事項・書名等を掲げ、各原本の表紙・本文・挿繪など多数の挿圖を加へました。更に本文の後に附した『考説』(二百九十餘頁)は、著者が多年の研究攻究に成つたもので、初めに各篇の梗概を掲げ、性質・素材・構想・表現・題號・年代・文體・用語・原本並に所在・系統・影響等に亘りて精微されて居ります。

目次	内容
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲朝顔の露の宮
▲▲▲かきれざと	▲▲▲ふせやの物
▲▲▲ほくらい物語	▲▲▲かきれざと
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲はもちひめ
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲まじゆのまへ
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲小まじゆのまへ
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲天狗の内裏
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲判官みやこばなし
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲九げつのか
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲いづつみか
▲▲▲おほもかいらい物語	▲▲▲笛の巻

要するに、本書は、從來刊行された斯の種のもの企て及ばなかつた多くの特色と、大きな光輝とを持つて居ります。されば本書を繕く人々は必ず獲る所のものが尠くないことを信じます。篤志の研究者にも、一般讀書家にも、是非一本を薦めたいと思ひます。

發行所 東京市神田區表神保町 中興館

◇戲曲を中心とした歌舞伎劇の研究論文集◇

第一高等學校教授 文學士 守隨憲治先生著

近世戲曲研究

上製美本全壹冊  
別圖八葉・挿圖二十七圖  
定價金二圓二十錢  
送料 金 十四錢

近世戲曲の本質を論じて其の歴史的展開を辿り、更にお國歌舞伎以來、明治演劇に至る迄の、箇々の問題を捉へて觀察批判したものであります。又中に新資料の紹介や年表類をも加へ、幾多の稀觀の挿圖を添へてあります。

多岐に渉る多くの問題が、興味深く而も明快に取扱はれて居るので、歌舞伎研究に入らんとする者のために、指針であり、教導者であると同時に、演劇に興味を有する多くの家庭の好讀物であります。

内容	内
歌舞伎劇脚本の本質	近松の脚本
上方歌舞伎の内容	近松の「けいせい弘誓船」の發見と脚
世界と趣向	近松の「けいせい弘誓船」の發見と脚
脚本「好色傳授」の存在	時代歌舞伎に現はれる女性―並木正三
お國歌舞伎の樹立	並木正三の「大坂神事捕」
「しのだづま」考	並木正三の「大坂神事捕」
坂田藤十郎の寫實劇	並木正三の「大坂神事捕」
藤十郎素描	並木正三の「大坂神事捕」

附録の「役者評判記年表」は、斯界の珍とすべく、嘗て整理刊行されたものもありませんが、一般に流布せず、今は高價なる稀書となつて居ります。本書に收めた此の年表は其の後、著者の研究により大に増訂を加へたもので、戲曲研究者に不可缺のものであります。

發行所 東京市神田區表神保町 中興館

文學博士藤村作先生序 福岡高等學校教授 安田喜代門先生著

# 再版 國語法概説

上製美本全一冊  
紙數三百四十餘頁  
定價金二圓三十錢  
郵税金十四錢

高等日本文法の教科書又は参考書として

本書は中學教育から一步進んで母國語に今少し深い理解を求められる人々のために、母國語の本質を説かれたものであります。國語學は明治以後、他の方面のすばらしい文運の發達に比し、進歩が遅々としてゐたかに思はれます。年代的背景もしつかりせず、文語・口語などいふ一種の規範文法にとらはれ、生々流動し展開する本質を忠實に凝視することが出来なかつた様です。本書は國語史を通じてその展開のあとを大觀し、不變の大局と推移の部分とを分けて、それを統一的に説かうといはしました。

されば本書は高等學校及び高等程度の諸學校の文法教科書として極めて適當なものと思ひます。而して文檢の國語科を受けんとする人々にとりては、文法の知識を『より多く豊富にし』、『よりよく纏める』ために、本書を必讀せねばならぬこと、信じます。

◇ 著者が多年の研鑽に成る日本文法の新研究 ◇

發行所 東京市神田區表神保町 中興館 振替東京四一三番

910.2  
F63  
3

終